

溝林遺跡

長野県上伊那郡中川村大字片桐溝林

緊急発掘調査報告書

1980

南信土地改良事務所
中川村教育委員会

溝林遺跡

長野県上伊那郡中川村大字片桐溝林

緊急発掘調査報告書

1980

南信土地改良事務所
中川村教育委員会

序

溝林遺跡は国鉄飯田線七久保駅の東方約1.5kmの上新田部落にある遺跡であります。本調査報告は、上新田部落を通過する農免道路と、県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘による記録保存の報告であります。

昭和55年6月から8月末にかけて発掘調査を実施しました。ちょうど梅雨期と暑中にわたったために予定時期より多くの日数を費しました。

この地域は、ほぼ完全な形をした土偶や、多くの土器が出土している刈谷原遺跡に続く一帯であり、多量の遺跡が発掘されました。繩文中期後葉のものである埋甕、浅鉢の他、器台、土偶の出土をみました。多くの遺物と共に住居址34軒、大小土壙30余基と、遺構も多く、特に住居址は互に切り合った複雑な形で発掘されました。広々とした圃場の土中からこうした得難い埋蔵文化財を数多く発掘し記録保存のできたことは関係者ひとしく喜びとする所であります。

この調査発掘にあたり、県教育委員会並に南信土地改良事務所、上伊那地方事務所の御指導をいただき、調査団長友野良一先生をはじめ調査員諸氏の御努力と、地元の方々の御協力により無事発掘調査を終了することができました。

ここに関係者の方々に対し、心から感謝申し上げます。

昭和56年3月

中川村教育長 松村 正文

例　　言

1. 本書は昭和55年度に実施した、片桐北部地区県営圃場整備事業ならびに農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う溝林遺跡の発掘調査報告書である。
2. 事業は南信土地改良事務所ならびに上伊那地方事務所の委託により中川村遺跡調査会が実施した。
3. 本報告書は契約期間内（昭和55年度）にまとめることが要求されているため、調査によって検出された遺構及び遺物をより多く図示することに重点を置き、文章記述はできるだけ簡略化した。
4. 本文執筆は、友野良一・宮下健彦がおこない、遺構関係の図面は宮下健彦が製図した。焼土はドットで表現した。なお、縮尺は各図に示してある。
5. 土器の復元、実測は和田武夫がおこなった。
6. 石器の実測は高山よし子、林小夜子、細田登志美がおこなった。
7. 写真撮影は友野・宮下が担当した。
8. 本報告書の編集は宮下がおこなった。
9. 遺物及び実測図類は中川村福祉センターに保管してある。

目 次

序

例 言 中川村教育長 松 村 正 文

第Ⅰ章 発掘調査の経緯.....	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過.....	1
第2節 調査会の組織.....	1
第3節 発掘調査経過.....	2
第Ⅱ章 遺跡の環境.....	4
第1節 遺跡の位置.....	4
第2節 地形及び地質.....	5
第3節 歴史的環境.....	6
第Ⅲ章 遺構と遺物.....	11
第1節 調査概要.....	11
第2節 住居址と遺物.....	11
第3節 土壌及び溝状遺構.....	75
図 版	
ま と め.....	106

【挿図目次】

第1図 溝林遺跡位置図	4
" 2 " 溝林遺跡の層序	5
" 3 " 溝林遺跡付近遺跡分布図	6
" 4 " 遺跡付近の地形・発掘区	8
" 5 " 遺構配置図	9・10
" 6 " 第1号住居址実測図	12
" 7 " 第1号住居址出土遺物	13
" 8 " 第1号住居址出土土器	14
" 9 " 第2号住居址実測図	15
" 10 " 第2号住居址覆土出土土器	15
" 11 " 第3号住居址実測図	16
" 12 " 第3号住居址覆土出土石器	17
" 13 " 第3号住居址出土土器	18
" 14 " 第3号住居址出土土器	19
" 15 " 第4号住居址実測図	20
" 16 " 第4号住居址出土遺物	21
" 17 " 第5号住居址実測図	22
" 18 " 第5号住居址出土遺物	23
" 19 " 第6・7号住居址実測図	24
" 20 " 第6号住居址覆土出土遺物	26
" 21 " 第7号住居址出土遺物	27
" 22 " 第8号住居址実測図	28
" 23 " 第8号住居址出土遺物	29
" 24 " 第9号住居址実測図	30
" 25 " 第9号住居址出土遺物	31
" 26 " 第10号住居址実測図	32
" 27 " 第10号住居址覆土出土遺物	33
" 28 " 第10号住居址出土土器	34
" 29 " 第11号住居址実測図	35
" 30 " 第11号住居址出土遺物	36
" 31 " 第12号住居址実測図	37
" 32 " 第12号住居址覆土出土遺物	38
" 33 " 第13号住居址実測図	39

第34図	第13号住居址覆土出土遺物	40
" 35 "	第14号住居址実測図	41
" 36 "	第14号住居址出土遺物	42
" 37 "	第15号住居址実測図	43
" 38 "	第15号住居址覆土出土遺物	44
" 39 "	第16号住居址実測図	45
" 40 "	第16号住居址出土遺物	46
" 41 "	第17号住居址実測図	47
" 42 "	第17号住居址覆土出土石器	47
" 43 "	第17号住居址出土遺物	48
" 44 "	第18・20号住居址実測図	48
" 45 "	第18号住居址出土遺物	49
" 46 "	第18号住居址出土土器	50
" 47 "	第19号住居址実測図	50
" 48 "	第19号住居址覆土出土土器	50
" 49 "	B地区構配図	51・52
" 50 "	第22号住居址実測図	54
" 51 "	第22号住居址覆土出土遺物	55
" 52 "	第24・29号住居址実測図	56
" 53 "	第24号住居址覆土出土遺物	58
" 54 "	第24号住居址出土土器	59
" 55 "	第29号住居址出土遺物	59
" 56 "	第29号住居址出土土器	60
" 57 "	第23号住居址実測図	60
" 58 "	第23号住居址出土遺物	61
" 59 "	第21・26・28・33号住居址実測図	62
" 60 "	第26号住居址出土遺物	65
" 61 "	第21号住居址出土遺物	66
" 62 "	第28号住居址出土遺物	67
" 63 "	第33号住居址出土遺物	67
" 64 "	第33号住居址出土土器	68
" 65 "	第31・32号住居址実測図	69
" 66 "	第32号住居址覆土出土土器	70
" 67 "	第27・30号住居址実測図	70

第68図	第27号住居址出土遺物	72
" 69 "	第30号住居址覆土出土土器	72
" 70 "	第25号住居址実測図	73
" 71 "	第25号住居址出土遺物	74
" 72 "	第34号住居址組石炉実測図	75
" 73 "	A地区土壤溝状遺構実測図	77・78
" 74 "	A地区土壤実測図	79
" 75 "	A地区土壤実測図	80
" 76 "	B地区土壤実測図	81
" 77 "	B地区土壤実測図	82

[図版目次]

図版 1	遺跡全景(上はA地区、下はB地区)	84
" 2	第1号(上)、第2号(下)住居址	85
" 3	第3号(上)、第4号(下)住居址	86
" 4	第5号(上)、第6号(下)住居址	87
" 5	第7号(上)、第8号(下)住居址	88
" 6	第9号(上)、第10号(下)住居址	89
" 7	第11号(上)、第13号(下)住居址	90
" 8	第15号(上)、第16号(下)住居址	91
" 9	第17号(上)、第18・20号(下)住居址	92
" 10	第19号(上)、第22・24・26・29号(下)住居址	93
" 11	第23・24・26・29号(上)、第21・28・33号(下)住居址	94
" 12	第32号(上)、第27・30号(下)住居址	95
" 13	第25号住居址(上)・A地区航空写真	96
" 14	A地区組石炉	97
" 15	B地区組石炉	98
" 16	土壤溝状遺構・柱穴	99
" 17	出土遺物 I	100
" 18	出土遺物 II	101
" 19	出土遺物 III	102
" 20	出土遺物 IV	103
" 21	出土遺物 V	104
" 22	発掘スナップ	105

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

県営圃場整備事業ならびに農免道路工事地区内の遺跡の調査を委託された場合には、受託するよう、県教育委員会より村教育委員会に連絡があり、おって南信土地改良事務所および上伊那地方事務所より緊急発掘調査について委託したい旨、村教育委員会への依頼を受け、両者と協議の結果、村教育委員会の編成した中川村遺跡調査会が中心になり、溝林遺跡発掘調査団をこの中に含めて業務を遂行することになった。

昭和55年5月24日上伊那地方事務所長との間で、さらに、昭和55年5月27日南信土地改良事務所長と村長の間でそれぞれ「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」を締結、また、村長と調査会との間で再委託契約を行った。一方、県教育委員会に発掘調査の着工について連絡し、友野良一氏を団長とする調査団は、6月16日から調査を開始した。

第2節 調査会の組織

○ 中川村遺跡調査会

会長	松村 正文	(村教育長)
理事	松村 安雄	(村教育委員長)
"	荒井 健	(村文化財調査委員)
"	平沢 善吉	(")
"	新井 稔	(")
"	下平 元護	(")
"	河崎 宣夫	(")
"	富永 精一	(村教育委員)
"	杉沢 要	(")
"	斎藤 英雄	(")
監事	松崎 伝重	(村会計監査委員)
"	北島 直一	(")
幹事	橋沢 薫	(教育次長)
"	鈴木 久美子	(教育委員会主任)
"	宮下 健彦	(教育委員会書記)

○ 溝林遺跡調査団

團長 友野 良一 (日本考古学协会会员) [発掘担当者]
調査員 和田 武夫 (長野県考古学会員)
" 小松原 義人 (")
" 本田 秀明 (")

第3節 発掘調査経過

昭和55年6月15日、発掘器材の運搬を行い、16日朝から器材収納及び調査休憩用テントの設営試掘調査を進めるための表土削り、グリッド設定に取りかかる。午後より発掘開始にあたって歓入式をおこない、村教育長(調査会会長)・友野団長から、発掘の目的及び今後の調査日程と調査方法について説明があった。

18日から本格的に試掘調査を進め住居址3軒他土壠を確認する。表土中からも多量の土器、石器片の出土があり、調査団で協議し全面発掘に切り変えた。当初の計画である約30m²の表土削りを済ませ、住居址、土壠、溝状遺構の調査を進めたが梅雨期の最中であり、遺構を保護するために覆ったシートの排水作業に多大な労力を消費せざるを得ず調査は難行を極めた。住居址は東方に密集しているところから、調査会及び調査団と協議をおこない発掘区を道路を隔てた東側水田に拡張し、当初計画の発掘区をA地区、拡張予定区をB地区と命名し工事引渡しの8月4日までにA地区の残りの遺溝の調査を急いでおこなった。

8月4日から発掘区をB地区に移し表土削り、グリッドの拡張に取りかかった。予想した通りに多量の遺物の出土があり、住居址が互いに切り合った形で次々と確認された。A・B地区で住居址33軒をはじめ土壠、溝状遺構とともに多量の遺物を発掘し、8月29日に発掘調査を終了した。

梅雨の後、日でり続きという悪い状態の中で発掘調査を実施したのであるが、調査団・土地改良区関係者・南信土地改良事務所・上伊那地方事務所・地主の方々・発掘調査に参加して下さった地元の協力者をはじめ、多くの方々のご協力とご配意によって、無事調査を終了することができます。心から感謝の意を申し上げます。

(順序不同)

大場政次郎	地田きく子	片桐千鶴代	上山 啓	宮下 金美	飯島 一郎
宮下 昌一	北沢 保雄	宮崎 早苗	荒井 晴雄	米山ちはみ	下平ルリ子
大場とみゑ	松村 恵介	大沢 厚啓	長谷川昌博	湯沢 均	宮脇 誠
伊藤 忠一	米山 節子	下平 秀治	下平 清枝	木下 文子	板久保くら子
大場 茂明	大場 林群	大場 林海	大場まき子	白鳥あき子	保科 徳子

下島 早苗	米山 和	米山 國枝	下平 哲	橋沢 一也	橋沢 定子
田中 栄	北沢 宏	宮下 信彦	宮下 早苗	有賀あさよ	大沢 晴子
米山 和孝	京沢 藤子	雨沢 恵子	米山 孝哉	寺沢 恵子	大場 道子
大場まき子	溝沢 公雄	北島しげり	松村みどり	切石多津子	

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置

溝林遺跡の地理的位置は、東経137度55分30秒、北緯35度38分40秒に位置し、長野県上伊那郡中川村横前地籍にある。遺跡に至るには、国鉄飯田線七久保駅を下車し、東方に1.5km進んだ地点に所在する。溝林遺跡は、中央アルプスに源を発する与田切川の押し出した七久保横前と続く扇状地上に位置し、標高664~667mに広がる集落跡である。

同一扇状地面には縄文中期の遺跡である梨ノ木遺跡、弥生前期の刈谷原遺跡が知られており、一帯には広く遺物も分布しており埋蔵文化財の宝庫といった観がある。

同遺跡からは、天竜川東側の良く発達した河岸段丘、遠く南アルプスの連山を望むことができ背後には、中央アルプスの山々がそそり立つ姿を見ることができ、非常に景観の良い所である。



第1図 溝林遺跡位置図 ($S = \frac{1}{50,000}$)

第2節 地形及び地質

1) 地形

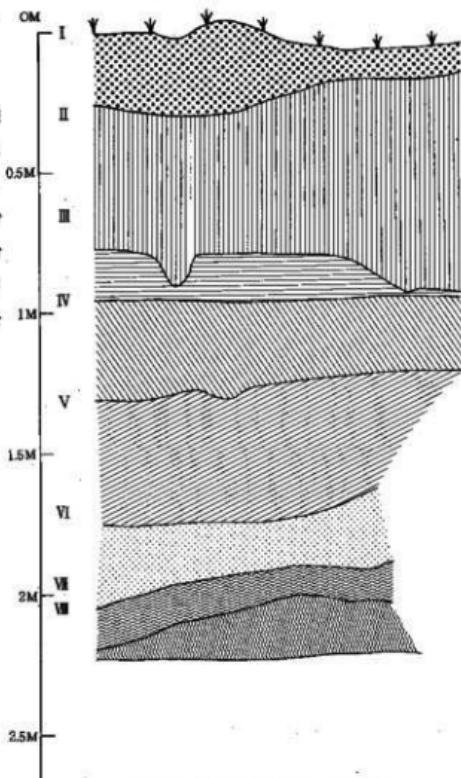
遺跡の位置する七久保・横前扇状地面は、与田切川と片桐松川によって浸食され、田切地形の特徴をよく表わしている。遺跡の所在する横前扇状地面は、中川村では最も高い平面の一つであるが、天竜川氾濫原から横前扇状地面に至るには、段丘崖をうねるようにして登らねばならず、途中、牧ヶ原面を通らなければならない。

上片桐から北に西ヶ原、高遠原、七久保には縄文時代から平安時代にかけての遺跡が数多く存在し、また、横前一帯にも広く遺跡が分布しており、古くから人々が住むには条件の良い所だったと言える。

2) 地質

横前扇状地の基盤は、古期火山灰層が砂礫層中に入り込んだ砂礫層からなり、その上に中期、新期ローム層が乗った地層から成る。当遺跡の層位は以下のとおりであるが、多少の傾斜があるため開田時に削り取られた部分埋土された部分もあるため、最も良く保存されていると思われるA地区北東の層位調査をした。

- 第Ⅰ層—耕作土
- 第Ⅱ層—黒褐色土（ローム粒含む）
- 第Ⅲ層—黄色ローム層（そのⅠ）
- 第Ⅳ層—黄色ローム層（そのⅡ）
- 第Ⅴ層—黄色ローム層（そのⅢ）
- 第Ⅵ層—砂を混入するローム層
- 第Ⅶ層—バミス粒が散在する層
- 第Ⅷ層—黄色ローム層（粘性）



第2図 濃林遺跡の層序 (1:20)

第3節 歴史的環境

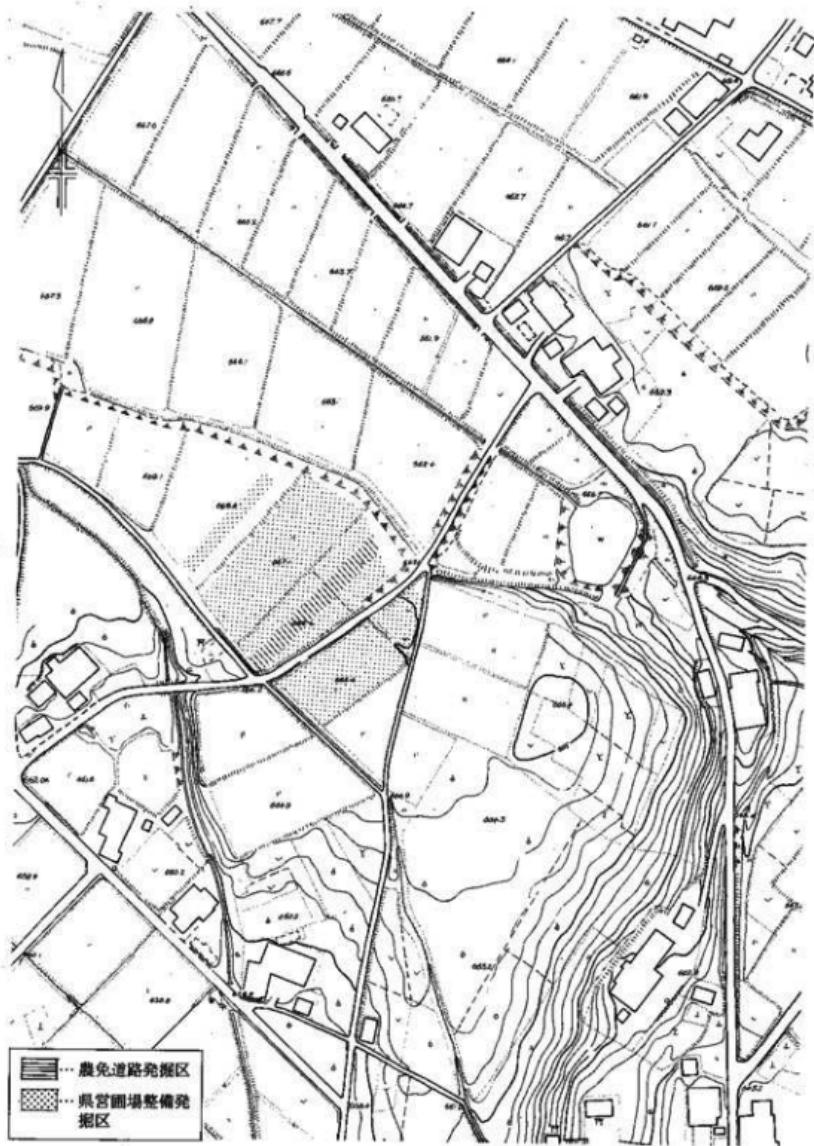
溝林遺跡のある中川村片桐地区は、分布調査の結果19箇所の遺跡の所在が確認されている。当遺跡付近の遺跡について簡単にふれたい。

- 1 梨ノ木遺跡、溝林遺跡の北、苅谷原遺跡に南接する位置にあり、遺物は広範囲に散布している。
縄文中期が主体で、一部弥生後期の遺物も見つかっている。
- 2 苅谷原遺跡、段丘縁部の一部発掘調査により弥生時代の条痕文系土器（苅谷原土器）が出士している。代表的な弥生前期の遺跡であるが、縄文中期の土偶の出土がみられ、梨ノ木遺跡との関係、遺跡の範囲は今後の調査をまたなければならない。
- 3 茶堂遺跡 溝林遺跡の東、段丘中央部に位置する縄文中期の遺跡。
- 4 橫山遺跡 溝林遺跡に南接する段丘縁部に位置し、一部は土地改良工事によって破壊されている。縄文中期及び弥生後期の遺跡。
- 5 針ヶ平遺跡 横前部落に南接する針ヶ平に位置し、畑、山林となっているが、開墾入植の際の宅地造成により一部破壊されている。縄文中期及び弥生後期の遺物が採集されている。



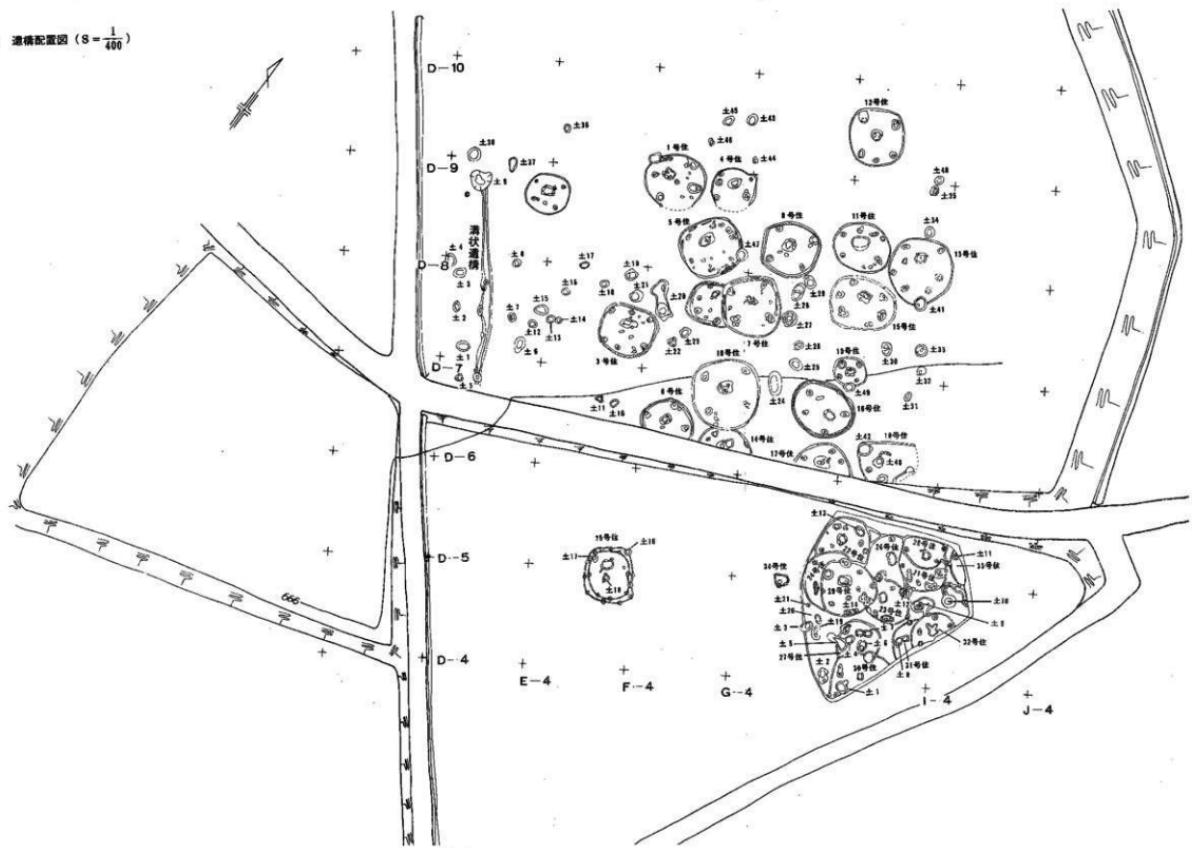
第3図 溝林遺跡付近遺跡分布図 ($S = \frac{1}{20,000}$)

- 6 原田遺跡 茅谷原遺跡の東に位置する。縄文中期主体の遺跡であるが、遺物は多く採集されず遺跡の範囲は不明である。昭和56年度県営圃場整備事業に先立ち発掘調査を予定している。
- 7 溝林遺跡 本報告書により調査を実施した遺跡であり発掘実施区（第4図参照）より東方の果樹園にかけて集落址が広がっていることが土地の人々の話や今回の調査の結果から推測される縄文中期の大集落址である。



第4図 遺跡付近の地形・発掘区 ($S = \frac{1}{20,000}$)

第5図 道橋配置図 ($S = \frac{1}{400}$)



第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 調査概要

溝林遺跡の発掘調査は、文化庁補助事業と南信土地改良事務所からの委託事業、さらに上伊那地方事務所からの委託事業を含めて行なう必要があり、調査区域の設定に苦慮した。

予備調査で表面採集を縦密に実施し、さらに土地の方々から過去に遺物が出土した事、圃場造成時の地形などをお聞きし、発掘区を大まかに決定。さらに調査団で再度事前調査をおこない第4図の発掘区を決定するに至った。

調査では、ブルトーザーによる表土を除いた後、鋤速がけで層を削り取り、遺構の存在が確認された後、全面発掘に切り換えた。

全面発掘は、圃場整備事業対象区外に基点を求め、発区予定区東西方向にA, B, C, ……南北方向に1, 2, 3, ……と10mグリットを設定して調査をおこなった。

調査の結果は、B地区に遺構が特に密集しておりさらに、東側に連続的に広がっていることが推定されたが、事業対象地区外であり、また、完了期日が迫っていたために中途で打ち切らざるをえなかったことは残念である。

確認された遺構は、縄文中期の住居址34軒、土壙、溝状遺構合計72基に及ぶがいづれも縄文中期に属するとと思われる。

第2節 住居址と遺物

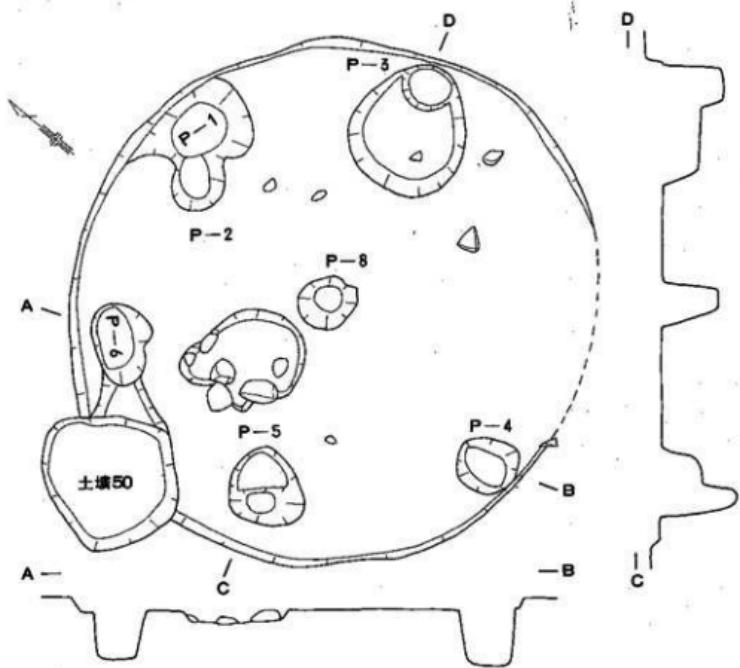
第1号住居址（第6～8図、図版2）

遺構（第6図）

プランはA地区遺構群の西方に位置し、北隣に第4号、東隣に第5号住がある。ローム層を14～16cm掘込んで床面を作っているが、やや西に傾斜しているが良好である。プラン全体は長径5.5m、短径5.7mのはば円形に近く、東の一部は水田造成時に削りとられ確認はできない。主柱穴は、P-1, P-3, P-4, P-5と考えられるが、P-6、土壙60との関連は不明である。さらに、P-8からは頸部以下を欠いた土器（図版17の1）が検出されたが、出土状態は自然に落込んだ様であり、また、ピット内から焼土、木炭等検出されずに埋蔵と断定することは困難である。組石炉は、主石を抜き取られている。

遺物（第7・8図）

土器1は口縁部に竹管による波状紋を施した深鉢形土器の口縁部破片、縄文中期初頭。2・3は、ソメン状の粘土紐を貼付した壺形土器口縁部、曾利I式に比定できる土器。5は頸部に隆線による格子状の文のある壺形土器、色調は灰褐色を呈し、多くの石英粒を含み、焼成良好。曾利

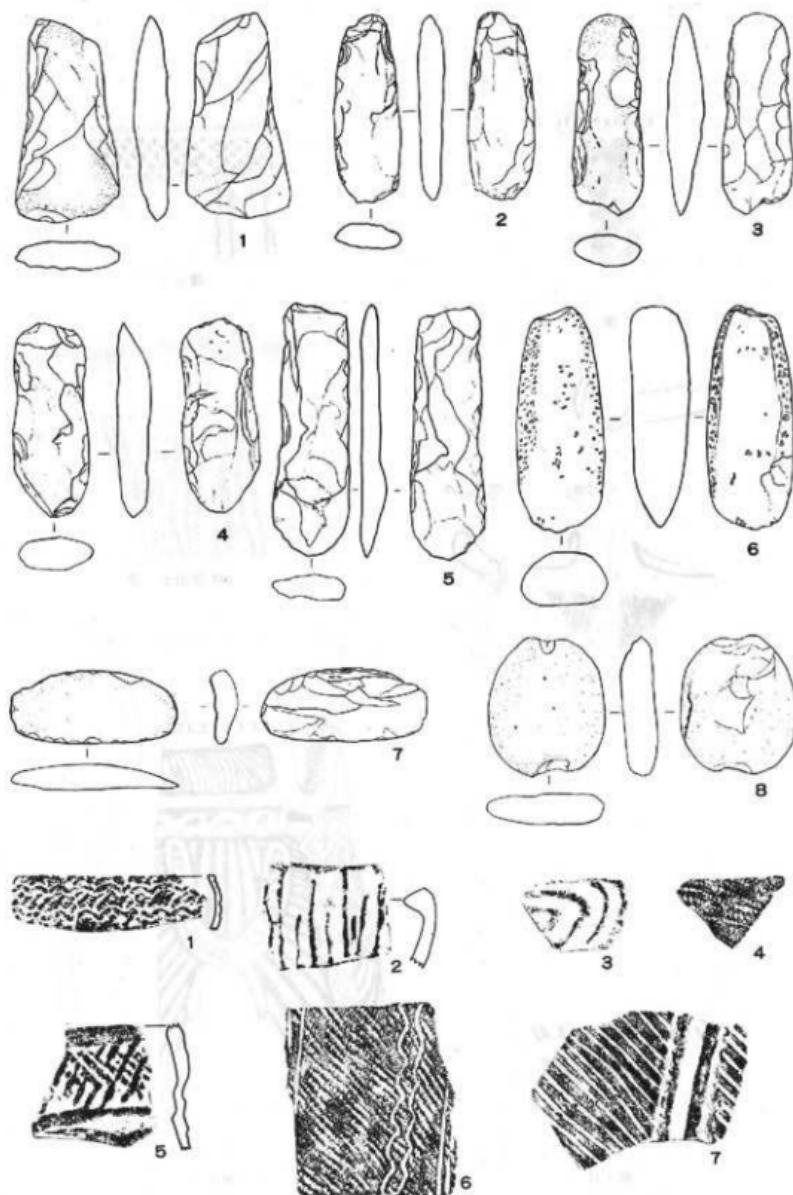


第6図 第1号住居址実測図 (1 : 60)

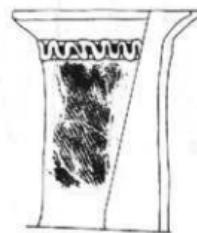
I式末あたりに比定されよう。4・6は地文が縄文で籠状器具で併行、または、蛇行沈線文が施された曾利II式土器7は半截竹管文が施された曾利II式末に比定されよう。

石器(7図)1.は硬砂岩挽形打製石斧。2・3・4・5は硬砂岩短冊形打製石斧。6は緑色岩の磨製石斧。7は硬砂岩の横刃形石器。8は硬砂岩の石垂。

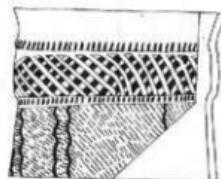
土器(8図)1.は口縁部無文帶頸部に粘土紐を蛇状に貼付し、胴部に縄文を施した變形土器。2.は口縁部が無文帶頸部に格子状に粘土紐を貼付し、胴部は縄文地に蛇行沈線文が施された深鉢形土器。1・2とも曾利II式に比定されるものと考えられる。3は口縁部に粘土紐にて渦巻文と沈線文、胴部は縄文地に縦、または、蛇行沈線文が施された深鉢形加曾利E II式末に比定されよう。5は口径9.4cm、高さ7.8cm小形無文の鉢形土器。6は口縁部に削痕が見られ、頸部に太目の粘土紐により、梢円区画が施され、内に沈線で埋めている。胴部は縄文が施されている土器である。7は口縁部が無文帶で、頸部にU字形の粘土紐の蛇行文が施され、胴部にエフロン状に粘土紐を貼付し、爪形文が施されている。籠状器具により沈線文などが施文されている深鉢形土器である。曾利I式末に比定されよう。



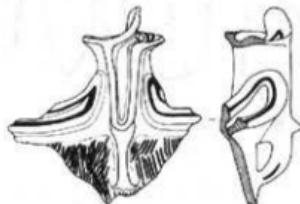
第7図 第1号住居址出土遺物 (1, 石器; 2~6・8は覆土, 1・7は床面
土器; 1・2・4~6は覆土, 7は柱穴内出土)



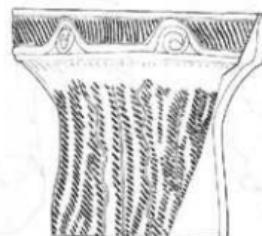
覆土1



覆土2



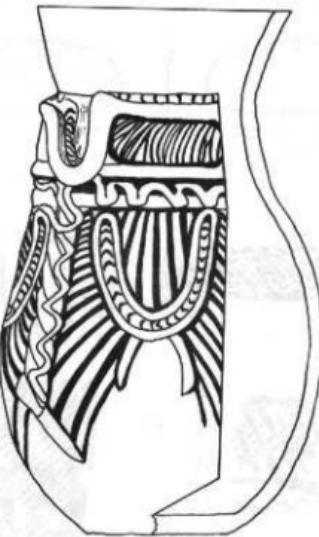
覆土4



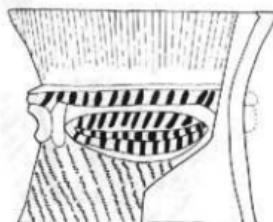
pit 8出土 3



覆土5



覆土7



覆土6

第8図 第1号住居址出土土器 (3分の1) (1~4は%、5~7は%)

第2号住居址（第9・10
図、図版2）

遺構（第9図）

本住居址はA地区遺構群の中でも最も西に位置する。プランは長さ4.5mを計る円形の住居址である。

壁高は20~30cmであり西が高く東に低い。壁は一定の傾斜を保っている。

床面はほぼ水平の状態でタタキが見られ良好である。住居址内にはP-1, 2, 3, 4の4つの柱穴址が検出されたが、いずれも主柱穴である。

組石炉は北壁よりにあるが、花崗岩を利用して丈夫に仕立てあり保存状態も良好であった。炉中央部からは焼土の検出をみた。埋甕は正位の状態で南東壁隅に検出された。

遺物（第10図）

土器

1は、粘土紐貼付の深鉢形土器。2は縦文と沈線の区画内に刺突文が施された土器。3は縦文に籠状器具による縦に2条の沈線を引いた土器片。4は蛇行状に粘土紐を貼付した深鉢形土器の頭部破片。5は口縁部無文帶の下部に横位に1条の沈線文をひき、頸部に沈線で綾杉状文を横位に施文した土器。6は壺形土器の口縁部破片と考えられるもので、太い隆帯をめぐらした上に蛇行状に粘土紐を貼付し、隆帯の下部に籠状器具による楕円区画を施し、内部に刺突文が付加された土器。7は籠状器具による沈線文と、粘土紐を蛇行状に貼付した壺形土器片。8は渦巻文土器。総じて曾利Ⅱ~Ⅲ式土器と考えられる。

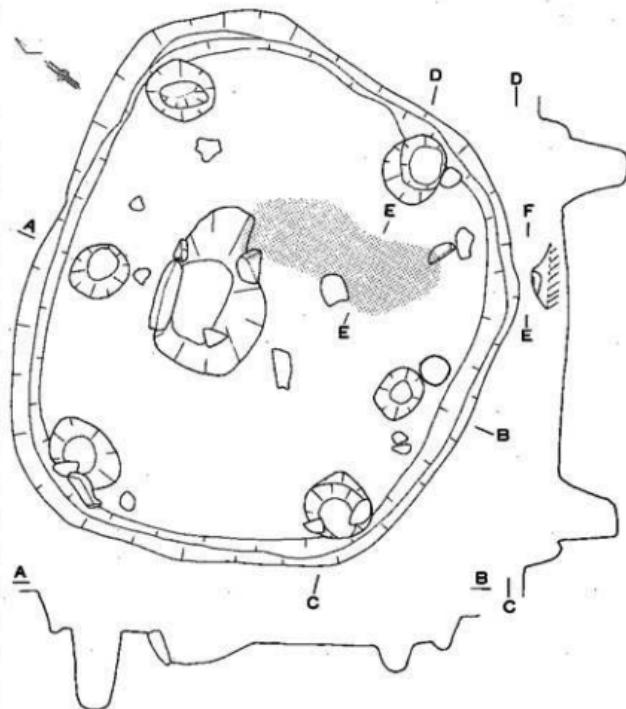


第9図 第2号住居址実測図 (1:60)

第10図 第2号住居址出土土器 (3分の1)

第3号住居址（第
11～14図、図版13）
遺構（第11図）

プランは、第2号
住居址の東に位置す
る。隅丸方形の住居
址である。床面は、
40cmほどのローム層
を掘り込み、タタキ
が良く行われ良好で
ある。柱穴は60～85
cmと深く掘込んであ
るが、P-5は30cm
と浅い。主柱穴はP
-1, 3, 4, 6と
考えられる。壁の周
囲には周溝が掘られ
ており良く保存され
ている。炉は粗石の
大部分が欠損してい
る。住居址内に残る
石が粗石の一部と考
えることともできるが
焼けた痕跡が認められず、他の住居址の粗石として持ち出されたと考えるのが妥当である。



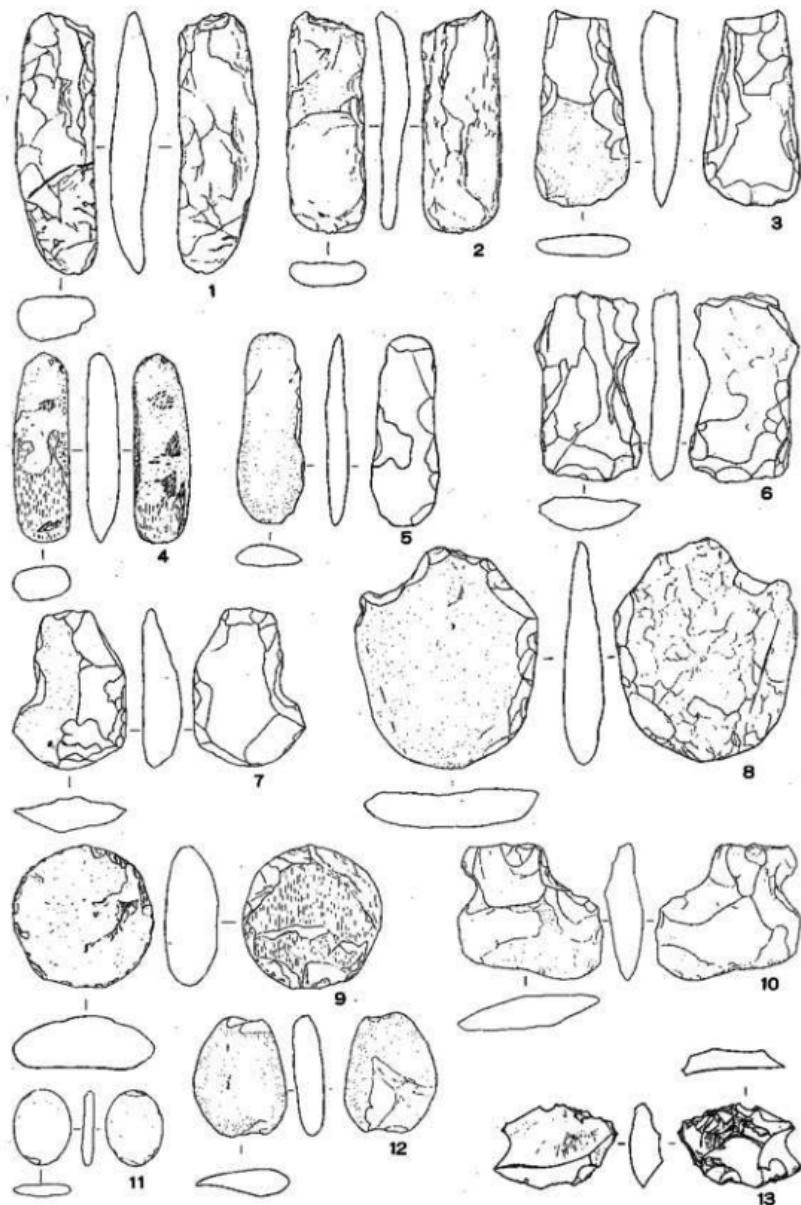
第11図 第3号住居址実測図 (1:60)

炉の東に焼土がマウンド状に堆積した状態で検出され、また、遺物も集中して出土した。この
マウンド状の焼土については、不明な点が多く、検討は後にゆづりたい。

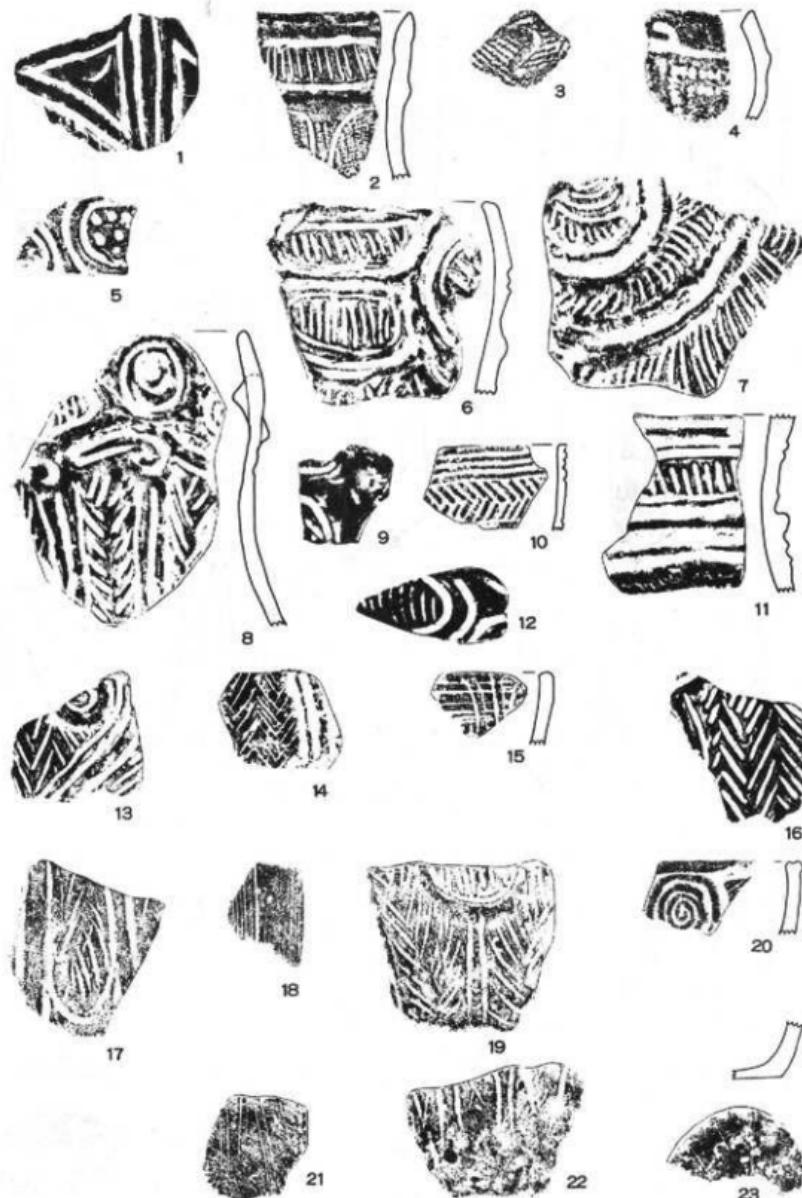
遺物（第12～14・15・16）

石器、1・2・5は、短冊形打製石斧。3は橢形石器。4は棒状石器。6は分銅形の打製石斧。
7は異形分銅形の一種、8・9は円形打製石斧。10は石匙、11・12は石垂。13は使用痕のある黒
曜石剥片。

土器（13図）1は縄文中期井戸尻Ⅱ式に併行すると考えられる土器。2・11は籠状器具により
隆帯間に縦及び横位または「く」の字文様の深鉢形土器。6・7・8・9・13・14・16・19は唐草
文様の土器。12は竹管で縦横位に施した土器。17・21は籠描による縦及び楕円区画内に綾杉状
の文様を施した土器。18・21は竹管による細い併行沈線文土器。20は口縁部に渦巻文のある深
鉢形土器。1を除いて総じて曾利Ⅱ～Ⅲ式に比定される土器である。



第12図 第3号住居址覆土出土石器 (1~12は $\frac{1}{2}$ 、13は $\frac{1}{3}$)



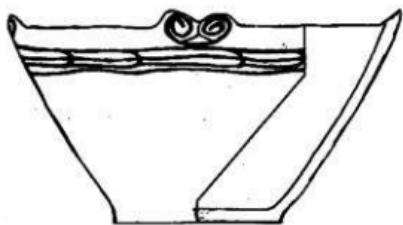
第13図 第3号住居址出土土器 (%, 1~8, 10~12, 14~23は覆土, 9・13は床上)



床上 1



埋甕 2



土偶(胸部)埴土 3



埴土 4



埴土 5

第14図 第3号住居址出土土器 (1・2は1%, 3は3%, 4・5は3%)

第4号住居址（第15・16図
図版3）

遺構（第15図）

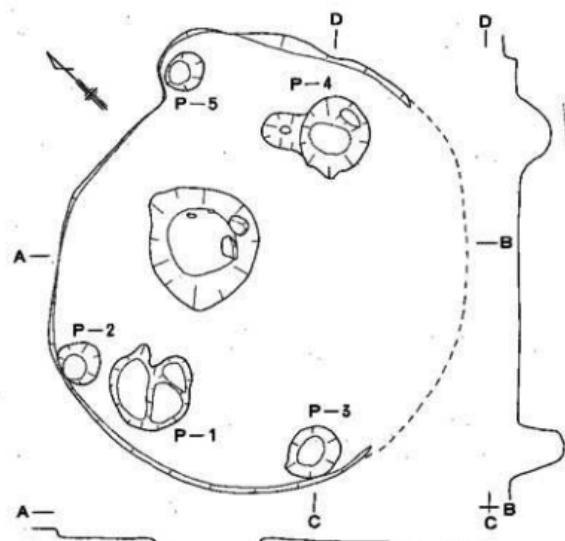
住居址は水田造成時に壁を削り取られ、10cmほどの壁を残すのみである。壁はP-5の所で内側に切れ込んでおり東側の一部を欠いているものの、不整形な円形であったと推定される。第1号住居址に隣接した住居址である。床面は軟らかである。P-1からP-5までいづれも柱穴と考えられるが、P-2, 3, 4, 5の組合せか、あるいはP-1, 3, 4, 5の組合せが考えられるがいづれにしても主柱穴は4本とみることができる。

炉は、1号柱と同様にすべて粗石を抜き取られている。

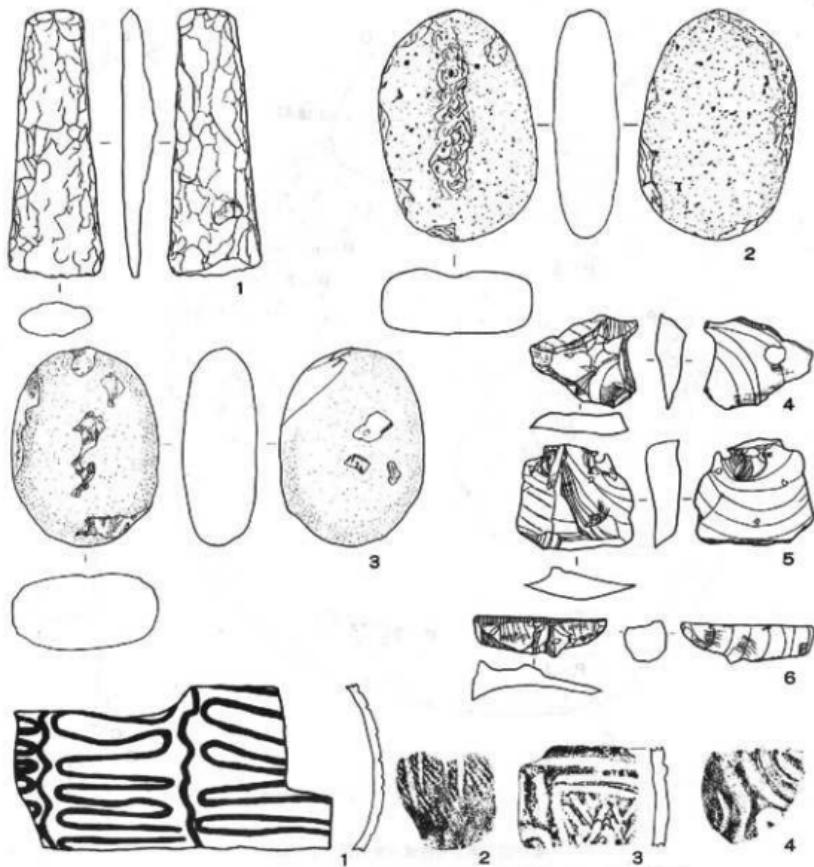
遺物（第16図）

石器、1は楔形の打製石斧、岩質は硬砂岩、中央部が片面にふくらみをもつていて石器である。2は硬砂岩製の楕円形凹石である。側縁部調整痕と思われる打痕が認められる。また、中央部に細長く三箇所に凹痕が附されている。3は硬砂岩製の凹石である。2同様側縁に調整痕がうかがえる。中央に凹箇所設けられている凹石。4剥片、2箇所片面に非連続的な剥利を指す。表面に長い縦目の溝状痕跡が見られる。縁辺に刃つぶれが窺える。5は剥片、表面に見られる長めの細かい溝状痕跡が窺われる。点状痕、点状、或は円状の加壓痕と思われるものが見受けられる。6は剥片、いづれも黒曜石である。上面が平、縁辺の片面のみに非連続的に剥離痕が施されている。縁辺に磨耗が見受けられる。

土器、1は薄手の深鉢形土器の頸部上の破片である。文様は籠状器具により、縦に蛇行沈線により区画された間を、充填するように蛇行沈線が描かれた特色のある土器である。2は繩文地に籠状器具により縦に太い沈線が引かれ、下部は無文帶に変化する、壺形土器と思われる。3は口縁部に近い部分で、太い沈線で区画文や綾杉文が施された土器。4は、太い籠状器具で円状に描れた土器。1は伊那谷特有の文様をもつ土器で、飯島町鳴尾天白遺跡5号住居・尾越6号住居址などから出土している、深鉢形土器の入組文と共通した点をもつ土器である。2・3・4は曾利Ⅲ式に比定される土器と考えられる。



第15図 第4号住居址実測図（1:60）



第16図 第4号住居址出土遺物（石器；1～3は覆土中%，4～6は覆土中%）
土器；1・2は覆土中，3は炉内%）

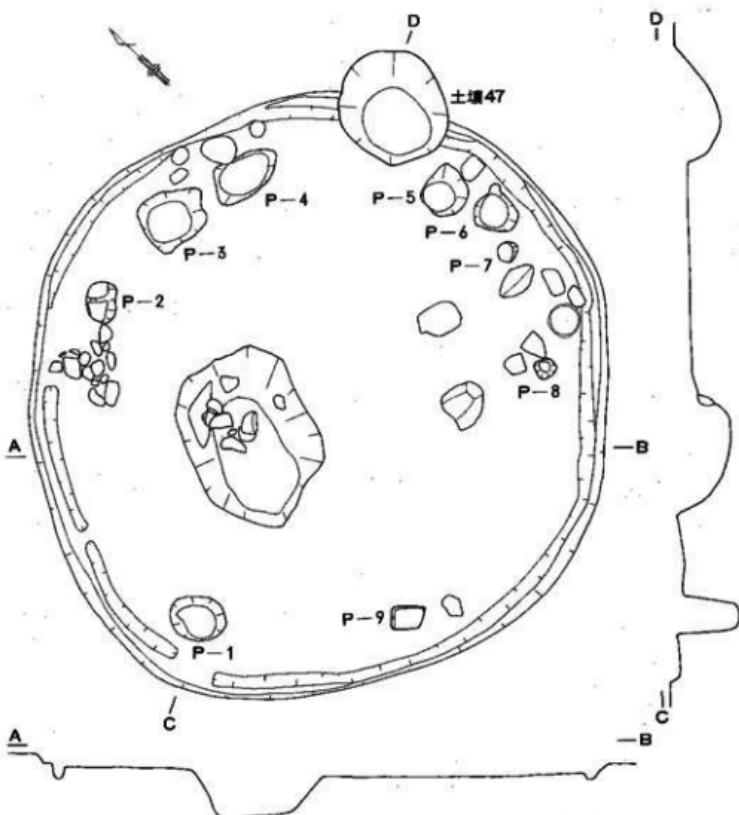
第5号住居址（第17・18図、図版4）

遺構（第17図）

住居址は西に第1号住居址、北に第4号住居址、東に第6・7号住居址、第8号住居址、南に第3号住居址に挟まれた位置にある。プランは短径6m、長径6.5mのほぼ円形に近く、壁から床面まで約15~16cmを計る。壁は直壁であり、周溝は西側の一部を除いて住居壁から直接設けている。西側の一部は住居壁から5~10cm内側に不連続的に掘込んでいる。床面は硬く踏み込まれており良好である。

住居址の西には10~15cm大の石を15個敷き詰めてあるが、祭儀時に用いられた場所であろうか。床面に埋められた状態であったが、下部及び上部からの遺物の出土はなかった。

主柱穴はP-1、P-3ないしはP-4、P-5ないしはP-6、P-9と考えられるが、い



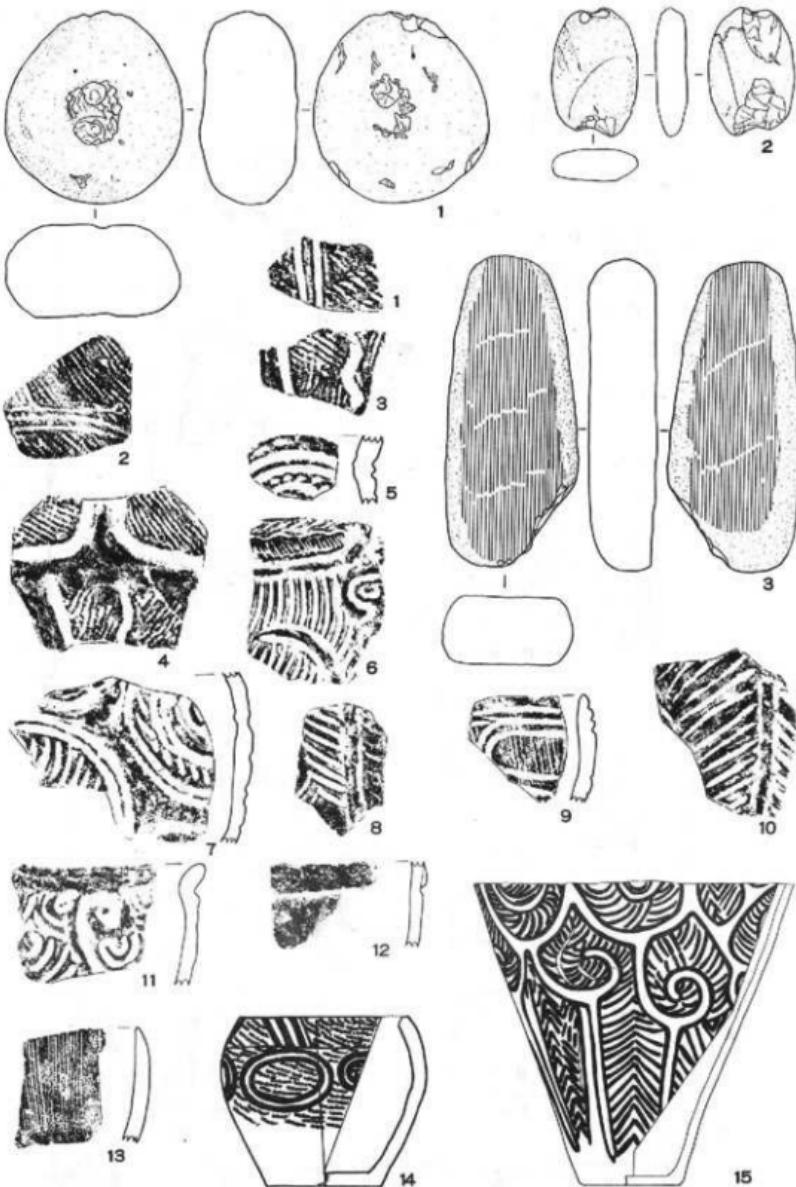
第17図 第5号住居址実測図 (1 : 60)

づれも床面から50cm程度掘込まれている。P-9のみ底部まで方形である。また、住居の東隅に設けられた埋甕と等距離にP-6、8が掘込まれているが、関係は不明である。炉に使用したと思われる粗石は抜き取られていた。

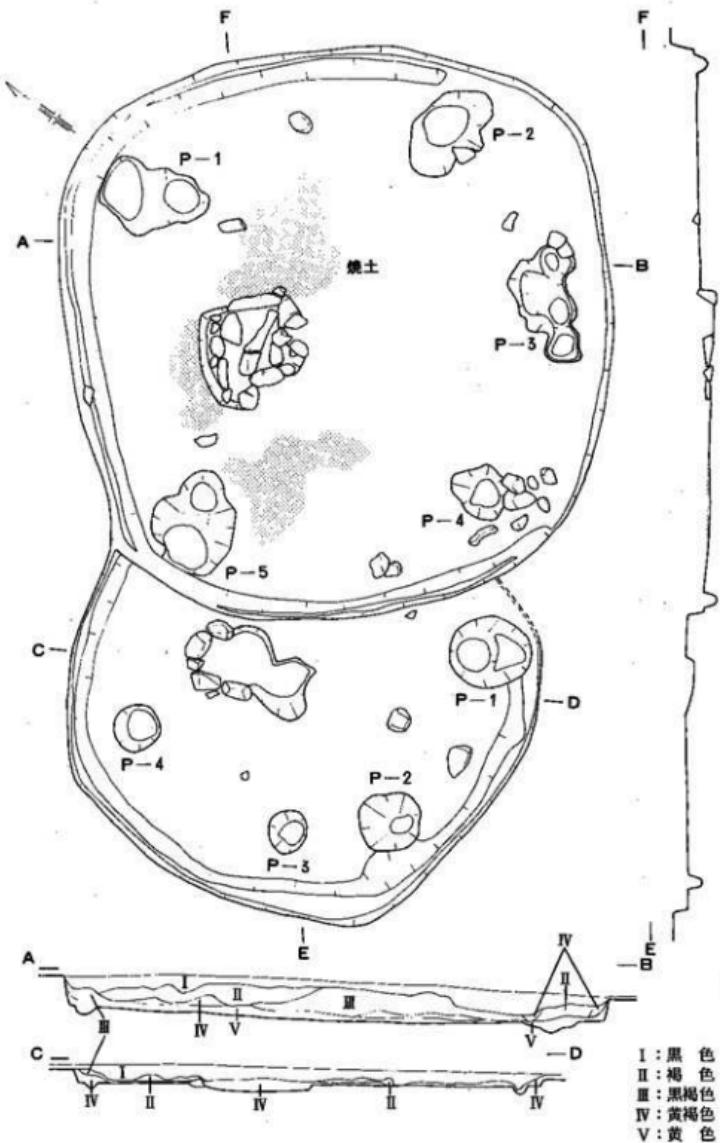
遺物（第18図）

土器、1・3・4は、縄文地に太い沈線で継・横または横円に引かれた深鉢形土器の破片である。2は斜縄文の地文に斜または横位に併行沈線文が施された土器。5・6・7・8・10は唐草文や渦巻文が施された深鉢形土器の破片。11は深鉢形土器の口縁部、口含は無文帶で頸部にかけ渦巻文を施した土器。12は無文の土器。13は細い併行沈線文土器。14は小形の變形土器、縄文地に沈線で斜に横円文が施された埋甕。15は大柄の唐草文の埋甕。総じて曾利Ⅱ～Ⅲ式に比定される土器。14の埋甕は曾利Ⅲ式に比定される土器。

石器、1は硬砂岩の凹石、2は石垂、3は緑色岩製の磨製石斧。



第18図 第5号住居址出土遺物
(石器 ; 1 ~ 3 は覆土中 1/2
土器 ; 1 • 2 • 6 • 8 ~ 13 は覆土中 , 3 • 4 は床上 , 5 • 7 は配石)



第19図 第6・7号住居址実測図 (1:60)

第6号住居址（第19・20図、図版4、5）

遺構（第19図、図版4、5）

本住居址は第5号住居址の東に位置している。住居址は第7号住居址によって北側半分を削り取られてはいるが、半径4.9mほどの円形に近いプランである。深さは約15cm平均であり、住居壁から4~20cm内側に周溝を設けてある。床面の状態は良好であり、ほぼ水平の状態を示す。柱穴はP-1~4までの4本が検出されたが、第7号住居址のP-5は、おそらく本住居址の柱穴を利用し拡張して第7号住居址の柱穴として用いたものと考えられる。主柱穴はP-1、2、4及び第7号住居址のP-5の合計4本であろう。

炉は床面から10cmと比較的浅く掘込んだ周囲に花崗岩を配置した組石炉であるが東側半分を欠いている。

遺物（第20図）

土器、1は柵文の地に2条の籠状器具による蛇行の沈線が引かれた土器片。2はやや荒い斜縞文が施された土器片。3はやや細かい繩文が斜位に施された土器。4は口縁部が欠損した深鉢形土器で、口縁部が無文で頸部以下は地文が繩文で縦位に併行沈線文が引かれた土器。5は沈線による唐草文が施された土器片。6は隆線が垂下する壺形土器の胴部破片。7は隆帶に籠状器具で連続に刻目が施され、上下は無文の土器片。総じて曾利Ⅱ~Ⅲ式に併行する土器と考えられる。石器、1は硬砂岩短冊形土器。2は大形の石斧。3は先が尖った知冊形石器。4は横刃形の石匙。

第7号住居址（第19・21図、図版4・5）

遺構（第19図、図版4・5）

本住居址は第6号住居址を切って作られた住居址である。プランは、長径6m、短径5.6mを計る隅丸方形の住居址である。第6号住居址の北側半分を取り、壁から床面まで約25~30cmを計り、周溝は住居址の東側を除いて掘込んである。床面は硬く良好である。住居址内にピットは5個検出されたが、位置から推定して、P-1、2、4、5の4つが本住居址の柱穴であろう。深さは平均約50cm。

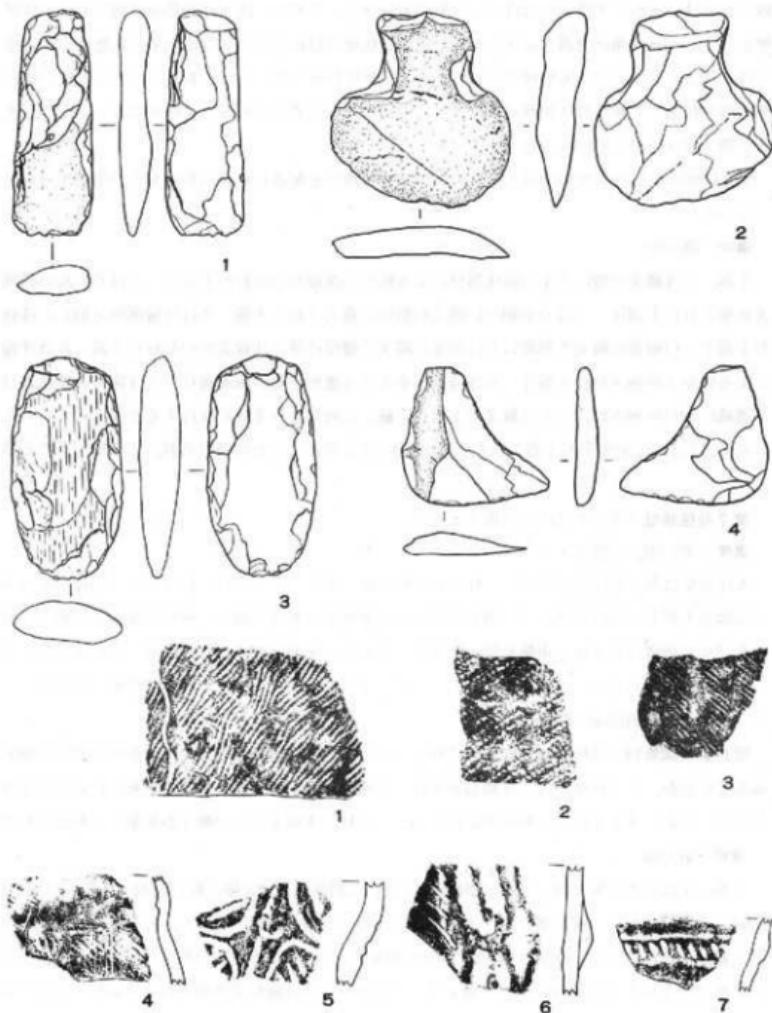
組石炉（図版14）は住居址の北寄りに検出されたが組石は破壊されている。炉内に組石が崩れ落ちているが、この状態から一度組石炉を作った後に、さらに北側を拡張して新たに設けたと思われる。なお、床面上には、炉を中心にしてローム粒、木炭まじりの焼土が拡散して検出された。

遺物（第21図）

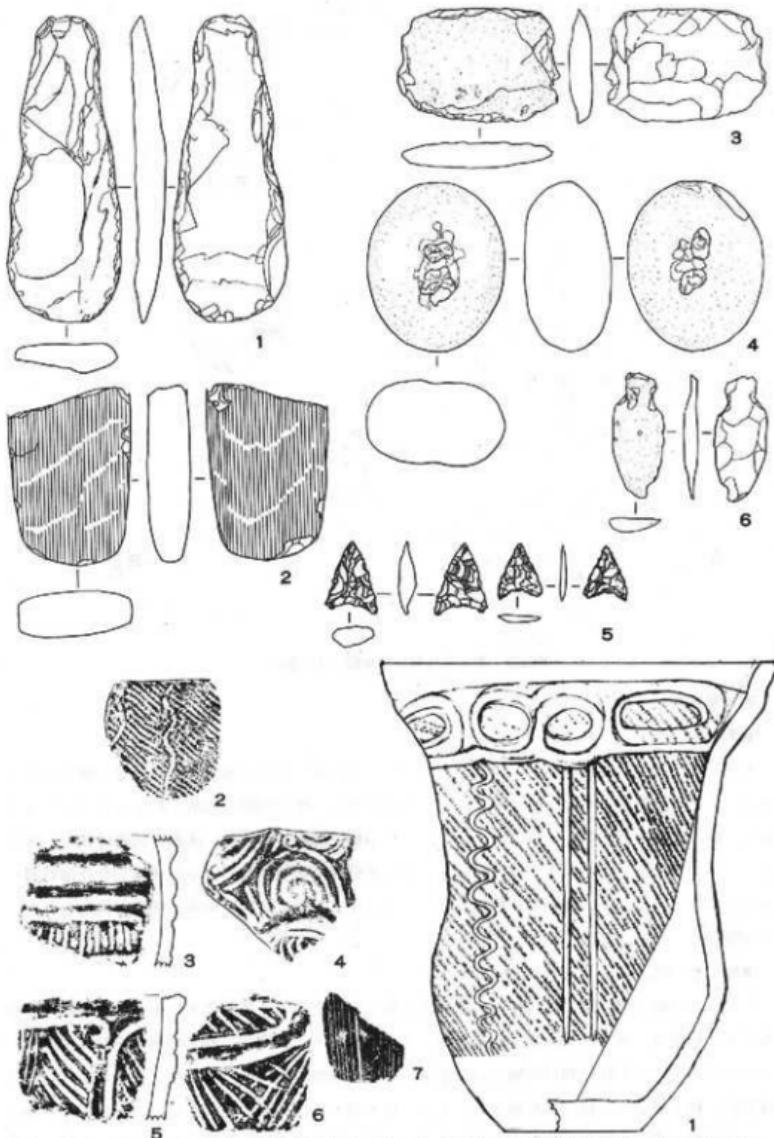
土器、1は口舌が無文帯で口縁に眼鏡状の区画文、胴部無文地に縦に蛇行沈線文土器。2は地文が繩文で縦位に蛇行沈線文が施された土器片。3は横位3条の隆線が施され、その下部の巾広い隆帶に縦位に籠状器具により併行線が施された深鉢形土器。4は渦巻文が施された土器。5・6は籠状器具により先端が渦巻文や同一施文具による併行または綾杉文が施された土器片。7は竹管具による細い併行沈線文土器。8は口縁文が渦巻文にて区画され、胴部下は繩文地に沈線による蛇行文や縦線の文様が施文されている曾利Ⅲ式の古い方に比定される壺形土器である。総じて、

曾利Ⅲに比定されると思われる。

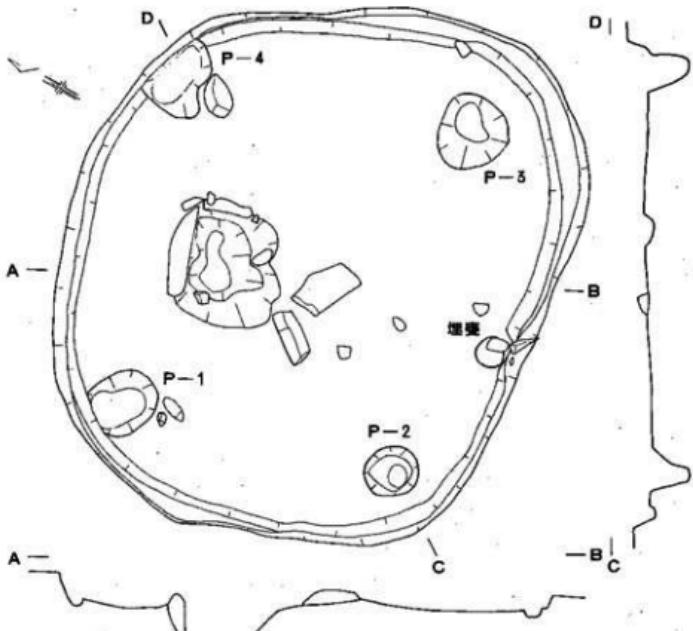
石器。1は硬砂岩の撓形打製石器。2は緑色岩の磨製石斧。3は打製の横刃形石器。4は硬砂岩質の凹石。6は縦形の石匙。5は黒耀石の石鏃である。



第20図 第6号住居址覆土出土遺物（3分の1）



第21図 第7号住居址出土遺物（石器；1・2・4・6は覆土中%、3は床上%、5は覆土中%）
土器；2～7は覆土中%、1は床上埋覆土上器%）



第22図 第8号住居址実測図 (1:60)

第8号住居址 (第22・23図、図版5)

造構 (第22図)

本住居址は第7号住居址の北に位置する。プランは長径5.7m、短径5.2mを計る隅丸方形である。ローム層から8~24cm掘込んだ高さに床面がある。壁の内側に周溝をめぐらしている。床面は、炉の周囲が最も高く、壁の方にくぼんでわづかに傾斜している。床面の状態は軟い。柱穴はP-1、2、3、4の4本が検出された。炉は部分的に破壊されているが使用した花崗岩質の組石は4枚であり、炉の周囲より検出された。5号住と同様に住居址東隅に埋甕が検出された。(図版18)

遺物 (第23図、図版18)

土器、1は縄文地に綴または蛇行に沈線文が施された土器。2は刺突文が施された深鉢形口縁部。3は刺突文とS字状文が施された土器。4・6・9・12は窓で、渦文が施文された土器片。5・10は隆帯に爪形状に刻目が施された土器。7は縄文地に沈線で区画が施された土器片。8は隆帯間に粘土紐貼付の蛇行文が施された土器。10・11・13は渦巻や鶴状器具による沈線文が施された深鉢形土器。14は太い縦に引かれた沈線文の間に刺突文や細に条線文が施された土器。埋甕の1・2は縦じて普利Ⅱ~直式に比定される土器。3は無文の鉢形土器である。

石器、1は縦形石匙。2は石垂。3は黒耀石の刃のある石器。



第23図 第8号住居址出土遺物

(石器: 1・2は覆土中%, 3・4は覆土中%, 土器: 1・3~10・14・15は覆土中%,
2・11~13は床土中%, 墓壙: 1・2は%, 3は%, 1は2内出土)

第9号住居址（第24・25図、図版6）

遺構（第24図、図版6）

本住居址はA地区の南に位置し第10号、第14号住居址が北隣にある。住居址の東半分は道路下にあるためにプラン全体を検出することはできなかったが、方形隅丸形の住居址であると推定される。

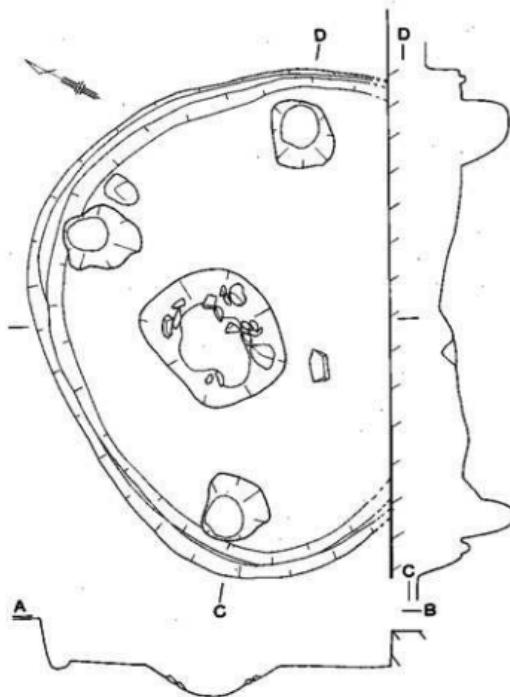
ローム層から45cmほど掘込んで作られている。壁は垂直に近い。東に傾斜する地形に作られているため西壁が高く、東壁は浅いものと思われる。周溝は壁に直属である。

ピットはP-1, 2, 3と3個が検出されたが、道路下にもう一つのピットが推定される。いづれも柱穴址である。床面は硬く、わざかにくぼむ。炉は粗石の大部分を欠いていた。おそらく、住居址外に何らかの様因で持ち出されたものと思われる。

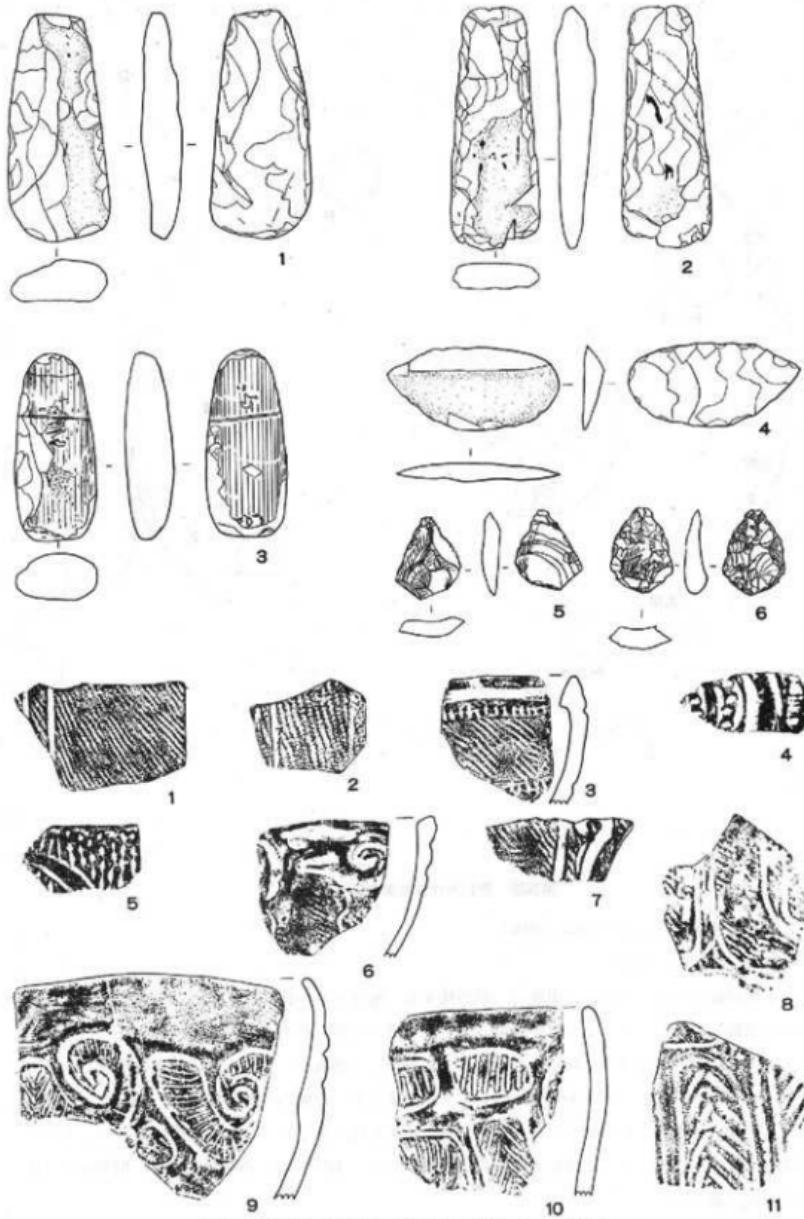
遺物（第25図）

土器。1は地文が縦文で縦に沈線文に併行に2本引かれた深鉢形土器と思われる。2は1と同様な施文土器であるが、縦文がやや太目である。3は口縁部破片、口舌に1条の沈線文をめぐらし、その下部と頸部に2条の連続刻目がめぐらされ、その間には斜縦文が施されている深鉢形土器。4は太い沈線文で円又は椭円に区画した間を、鑓状器具の先端で刺突文を施した土器。5は刺突文が施された土器。6・7・8は口縁部に渦巻文が集約し地文が縦文で、縦に蛇行沈線文が施された土器。9は口縁部が無文帶で、頸部から胴部にかけ唐草文様が施された壺形土器である。10・11は口縁部が無文帶で頸部は太い沈線文で椭円または長方形に区画され、その内部を縦および綾杉文が施された壺形土器。1・2は曾利Ⅲ式、3はⅡ式、4・5・6・7・9・10は曾利Ⅲ式、Ⅲ～Ⅳ式に併行する土器と考えられる。

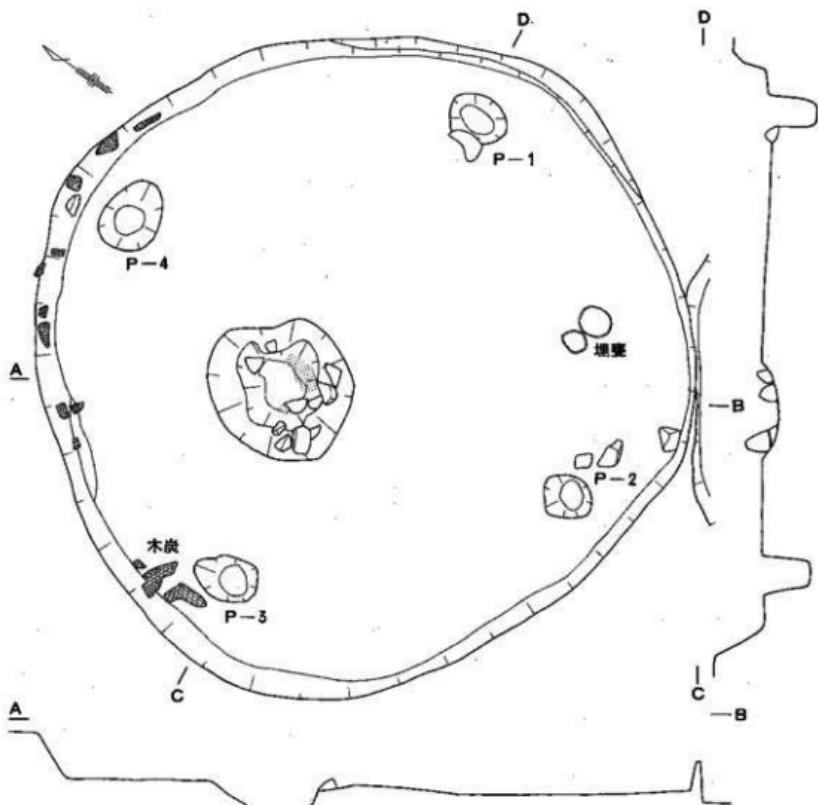
石器。1・2は硬砂岩の撓形打製石斧。3は緑泥変岩の磨製石斧。4は表面が自然面をのこし、裏面は打製の横刃形石器。5・6は黒耀石の石鎌。



第24図 第9号住居址実測図 (1:60)



第25図 第9号住居址出土遺物 (3%, 石器; 5・6は分)



第10号住居址 第26図 第10号住居址実測図 (1 : 60)

第10号住居址 (第26~28図、図版6)

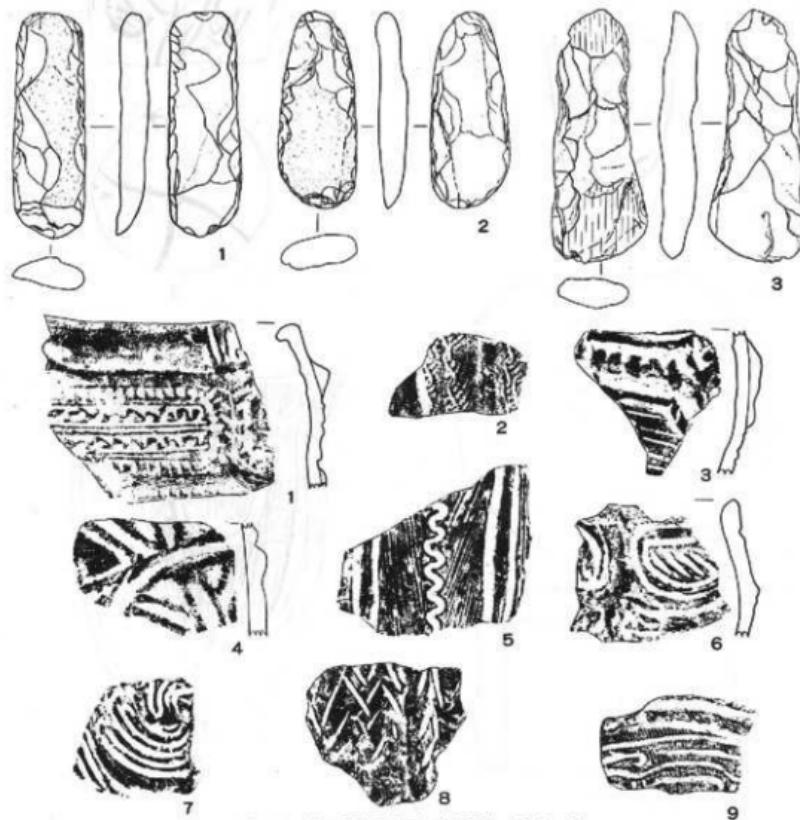
遺構 (第26図、図版6)

本住居址は第14号住居址と東壁の一部が接する。短径 6.8 m 長径 7.4 m の隅丸方形の検出された住居址中最大である。北西の壁に貼り付いた状態で炭化した木材が多量に検出された。また床面より 5 cm ほど高さに炭化した木炭が検出された。(図版6) 本住居址は何かの原因で火災にあったものと思われる。床面は硬く良好であり、東にわづか傾斜する。柱穴は、P-1, 2, 3, 4 本が検出された。炉は第9号住居址と同様に粗石が抜き取られていた。埋甕は第3号、第5号、第8号住居址と同じように住居址の東隅に検出された。本住居址と第14号住居址の相関関係は後の所見に譲りたい。

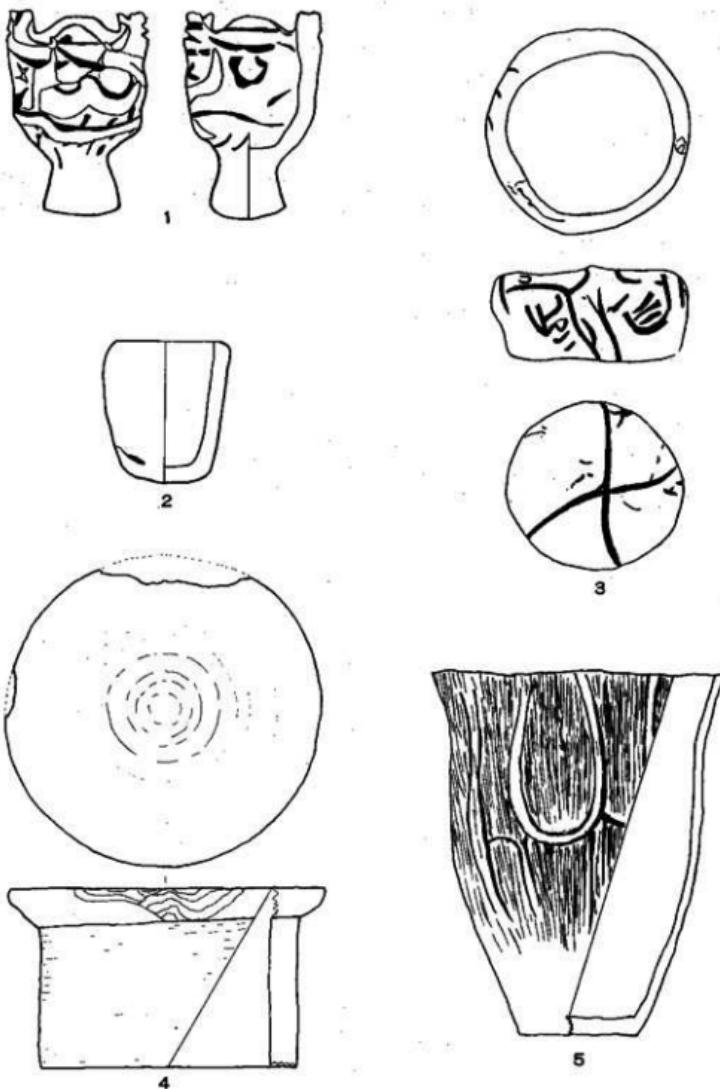
遺物 (第27・28図)

土器 1は口縁部無文帯であるが、2箇所に隆線が施され、頭部には隆線による区画が施され内部に連続刺突文が区画内をめぐり、さらに中央に2本の隆線が横に引かれた中に、粘土紐を組紐状に蛇行させた文様が施された土器。2は繩文地に結節文が垂下した土器。3・6は隆線の沈線が施された深鉢形土器。4荒い隆線文土器で曾利Ⅰ式の新しい方の土器。5は太い沈線文と蛇行線文の間を条線文が施されている曾利Ⅱ式に比定される土器片。7は重孤文土器。8は荒い綾杉文。9は横位の沈線文に細い条線文が施された土器。(30図) 1は台付ミニチュア土器。2はミニチュアの壺形土器無文。3ミニチュアの浅鉢。(29図) 4は径が16.7cm、高さ9.5cmの器台。5は口縁部を欠く壺形土器で、文様は篦状器具により浅い沈線で長楕円に区画した埋甌土器である。絶じて曾利Ⅱ～Ⅲに比定される。

石器 1は硬砂岩短冊形打製石斧である。2・3は楔形硬砂岩打製石斧である。



第27図 第10号住居址覆土出土遺物（3分の1）



第28図 第10号住居址出土土器（土器；1～3は覆土中%，4は床面%，5は埋藏%）

第11号住居址（第29・30

図、図版7）

遺構（第29図、図版7）

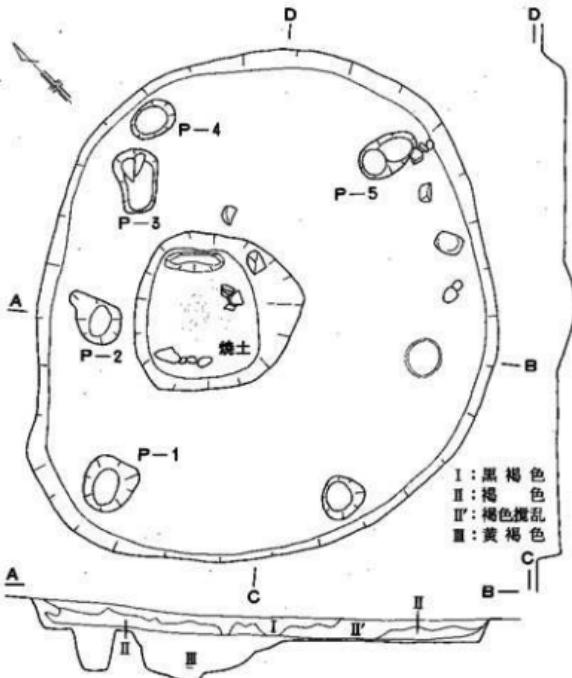
本住居址は南に第8号住居址、東に第15号住居址、北に第13号住居址に挟まれた位置にある。壁高は、25～30cmを計る。プランは、東壁が丸く張り出し、西壁の一部が内側に入り込む不整形な形である。

床面は東側が西側より5cmほど低く傾斜している。床面は硬く良好である。住居内に6個のピットが検出されたが、主柱穴と考えられるのはP-1、P-4、5・6の4個である。炉は大きく、床面より50cm程掘り込まれ、内部には焼土が厚さ10cmほど堆積していた。粗石炉と思われるが粗石をほとんど欠いている。尚、第10号住居址と同様に埋甕が東壁に接し発見された。

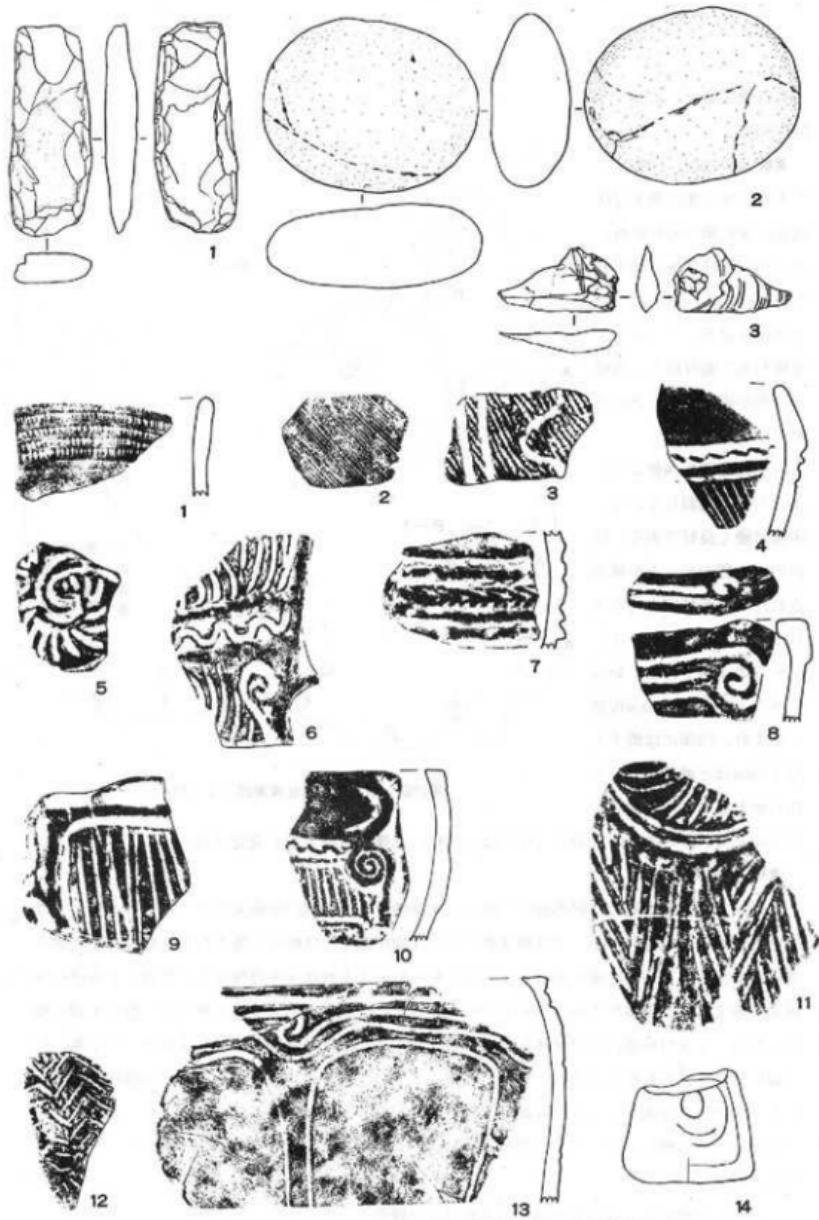
遺物（第30図）

土器、1は攢形土器の口縁部破片である。4条横位に連続刻目が施文された特色的土器。2は細い竹管による条線文土器。3は縄文地に太い沈線が縱または蛇行に施された土器片。4は無文帯の口縁部下に1条の沈線を施し、その内に粘土紐による波状文を埋頭部下は竹管による併行沈線文が施文された深鉢形土器。5・6・8・9・10・11は渦巻文、唐草文を併用した攢形土器の破片である。7は口縁部に近い深鉢形土器の破片である。横位の隆線間に綾杉文を付した土器、12は綾杉文がくずれた形の土器片。13は口縁端に1条の沈線をめぐらし、その下に渦巻状入組文と、大きく梢円状に区画がなされた深鉢形土器である。総じて曾利Ⅱ～Ⅲ式に比定される土器である。13は床面上から検出された土器で曾利Ⅱ式に併行と思われる土器である。14はミニチュアの壺形土器。

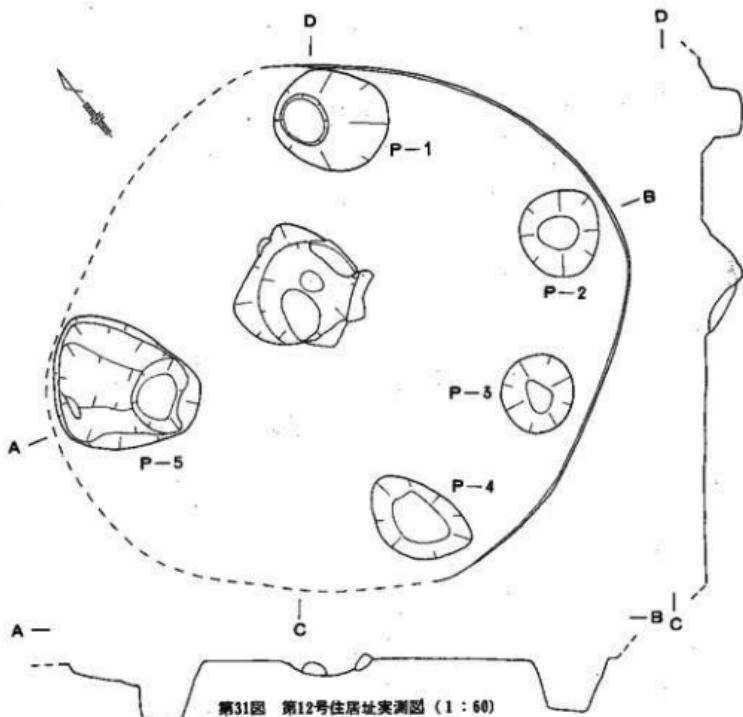
石器、1は硬砂岩の短冊形石器、2は硬砂岩の礫器。



第29図 第11号住居址実測図（1:60）



第30図 第11号住居址出土遺物 (石器; 1・2は覆土中 $\frac{1}{2}$, 3は覆土中 $\frac{1}{2}$
土器; 1~12は覆土中 $\frac{1}{2}$, 13は床上 $\frac{1}{2}$, 14は覆土中 $\frac{1}{2}$)



第31図 第12号住居址実測図 (1 : 60)

第12号住居址 (第31・32図)

遺構 (第31図)

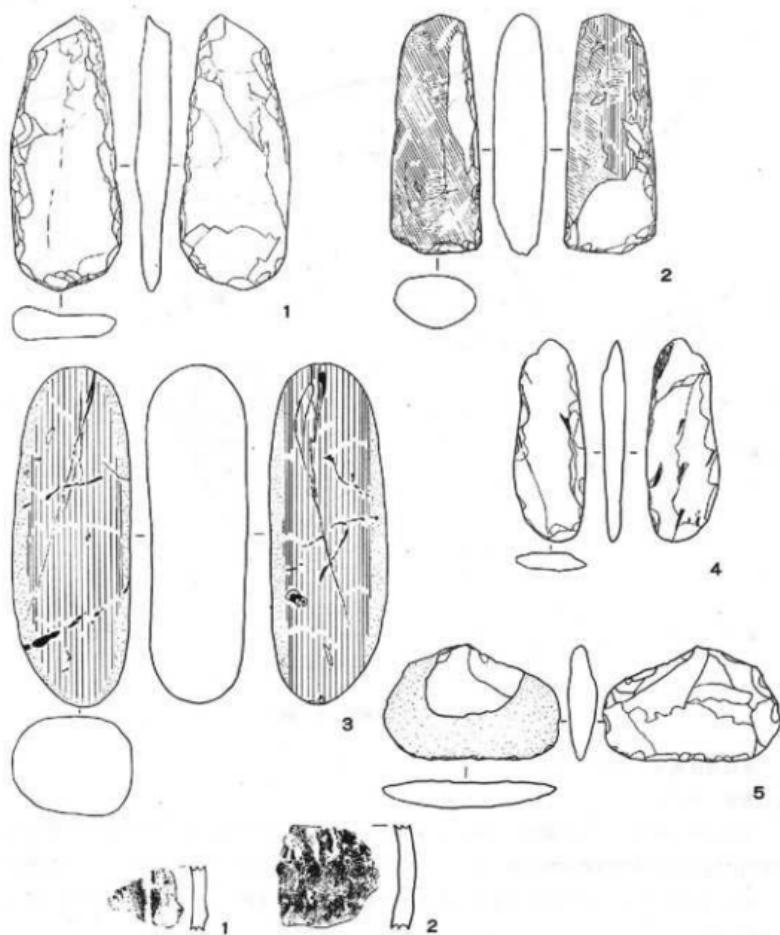
本住居址は検出された遺構群中、最も北に位置する。第1号住居址、第4号住居址と同様に水田造成時に住居址の西壁を削り取られ、プランの全体を検出確認するに至らなかった。また東壁も削り取られているために壁高は不明である。床面の状態は、東側ではA地区住居址中最も硬く良好であった。

ピットは5個検出されているがP-3を除く4個が主柱穴と思われる。炉は粗石の大部分を欠いており、住居外に持ち出されて使用したか、工事の際破壊されたかは不明である。

遺物 (第32図)

土器、1は縦に沈線と細い斜条線をつけた土器片。2は無文の部分で、おそらく底部に近い箇所であろう。結じて曾利Ⅲ式に比定される時期と考えられる。

石器、1は硬砂岩の挽形打製石斧。2は緑泥変岩の挽形打製石斧。3は自然石の棒状石斧。4は挽形石斧。5は硬砂岩の横刃形石器。

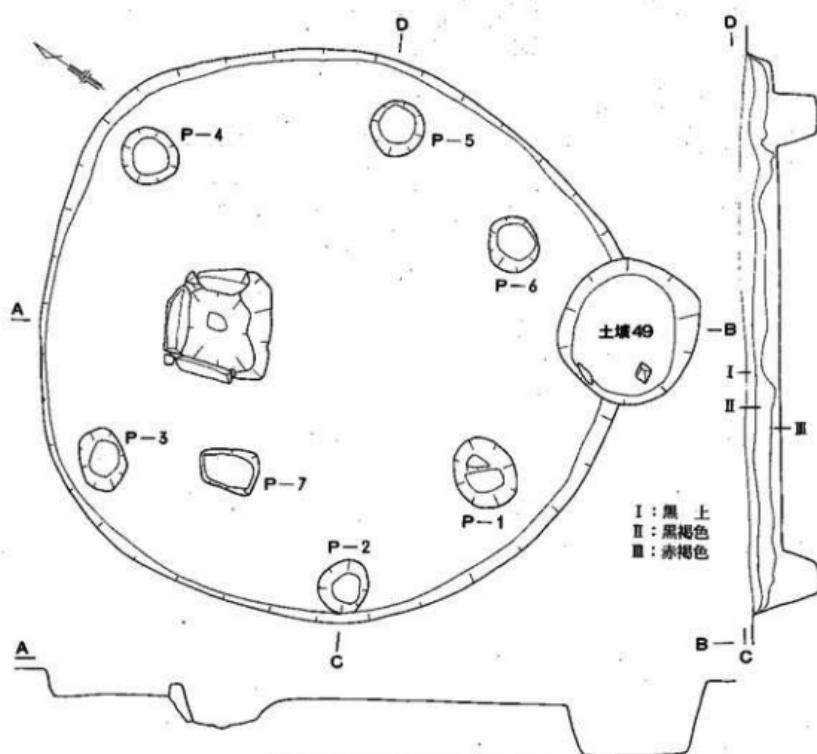


第32図 第12号住居址出土遺物（3分の1）

第13号住居址（第33・34図、図版7）

遺構（第33図、図版7）

本住居址は西に第11号住居址、南に第15号住居址に隣接する。プランの径は6.1mを計る円形であり、壁高は30cmを計る。壁は垂直に近く、床面は良好である。ピットは7個検出されたが、P-7を除いて柱穴址と考えられる。住居址東に土壤49があり、住居址を切る形になっているが両者の相関は不明である。炉は、西壁よりのP-4とP-7のほぼ中間にもうけられる組石炉で



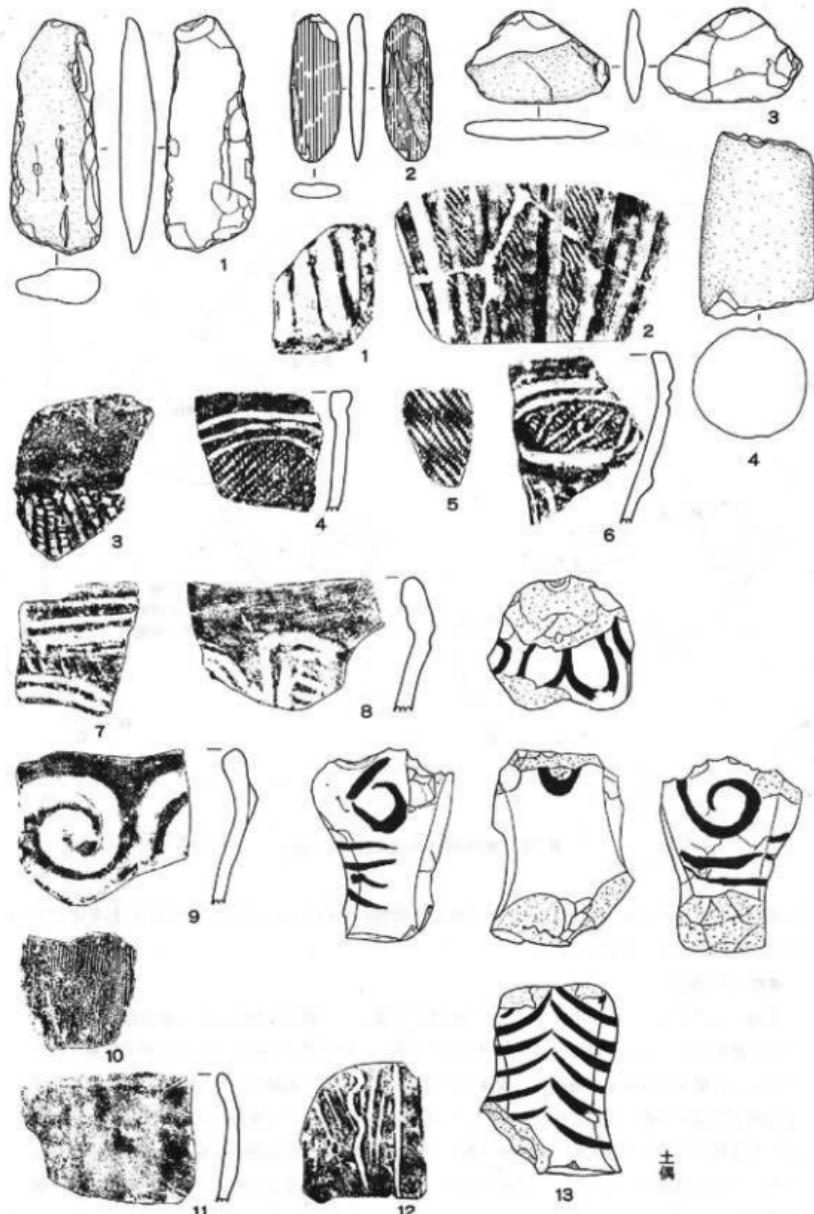
第33図 第13号住居址実測図 (1 : 60)

炉床は床面より35cmほど掘込まれている。粗石の東側の炉石を欠いているが花崗岩の石を用いており、比較的大きく安定している。

遺物（第34図）

土器、1はソーメン状粘土紐をかけた曾利Ⅰ式土器。2は縄文の地文に太い墜状器具で縁に施文した彫形土器。3は口縁部の破片と思われる土器で、無文帯の下部は太目の斜縄文が施された土器。4は縄文と沈線文が施された深鉢形土器。5は斜縄文土器破片。6は口縁が無文帯、頭部下は地文に縄文を施し沈線で楕円に区画した深鉢形土器。7・8は沈線による併行線や渦巻状を施した深鉢形土器。9は大形の渦巻文で飾った深鉢形口縁部。10は細い条線文土器。11は刷目文土器。12は墜状器具で引いた蛇行沈線土器片。総じて曾利Ⅱ～Ⅲ式に比定される土器。13は土偶の腰部。

石器、1は硬砂岩挽形打製石斧。2は自然面を残した打製石斧。3は硬砂岩の横刃形打製石器。



第34図 第13号住居址覆土出土遺物 (石器 ; 1~3は%, 4は%)
土器 ; 1~12は%, 13は%)

第14号住居址（第35・36図）

遺構（第35図）

本住居址は第10号住居址の東壁の一部と接する住居址であるが、第9号住居址同様プランの一部が道路下にあり遺構全体を確認することができずに、従って住居址の形及び大きさを知ることはできなかった。

壁はローム層より切り込み、壁高40cmを計る。床面は炉の付近（中央部）が最も高く、壁側に傾斜している。

床面は全体にタクキが良くみられ良好である。

ピットは4個検出されたがP-1（深さ15cm）P-2（深さ46cm）P-3（深さ26cm）P-4（深さ33cm）を計る。柱穴はプラン全体が明らかでないために不明である。

炉はP-2に切られたような状態がみられる。組石炉であったと推定できるが、組石の大部分を欠いているために断定できない。炉芯からは焼土が出土した。

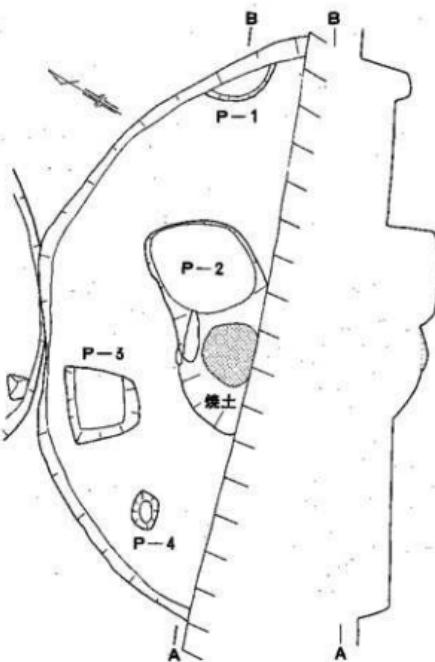
炉から等距離のところ、P-4の東に器台，

P-1の北に伏せ甕が検出されたが伏せ甕は口縁部を3cmほど床面内に埋没させていた。（図版19）

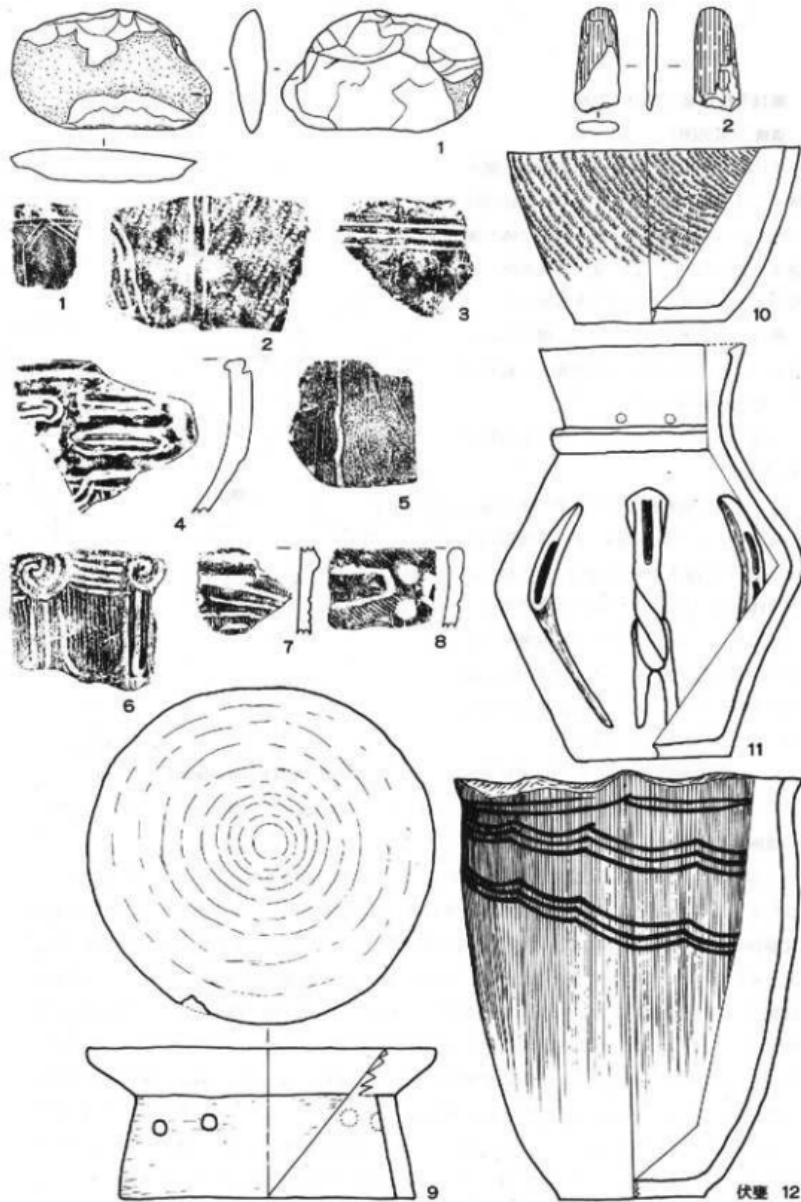
遺物（第36図）

土器、1は竹管による沈線文土器、中期初頭。2は地文が斜繩文で、鏡先にて2条沈線が引かれた土器。3は横位に3本の併行沈線が施され縦に細い沈線が引かれた土器。4は口舌に1条の沈線がめぐらされ、頸部に細長の横円文が2段に描かれた深鉢形土器。5は鏡先による沈線文が引かれその間に細い条線文で施した土器。6は渦巻文とH状沈線文が施された土器。7は横位に沈線文と渦巻文が施され、その間に条線を引いた土器。8は繩文地に籠状器具により横円形に区画文を付し、その間に2箇の円形凹を付した深鉢形口縁部。9は径18.3cm高さ7.9cm、胴部に2箇づつ2箇所に穴を開けた器台。10は斜繩文の施された鉢形土器。11は口縁部が無文帯、頸部に縞帶をめぐらし、4箇の有孔が設けられ、胴部は「く」字にふくらみをもつ有孔鈎付土器、胴部に太い粘土紐を貼付する例の少い土器である。12は口縁部をわずかに欠いた甕形土器で、地文に細い条線文が施され頸部に2条～3条の波の小さな重弧文が施された土器、伊那地方によく見受けられる土器である。1を除いて曾利Ⅱ～Ⅲ式の土器である。

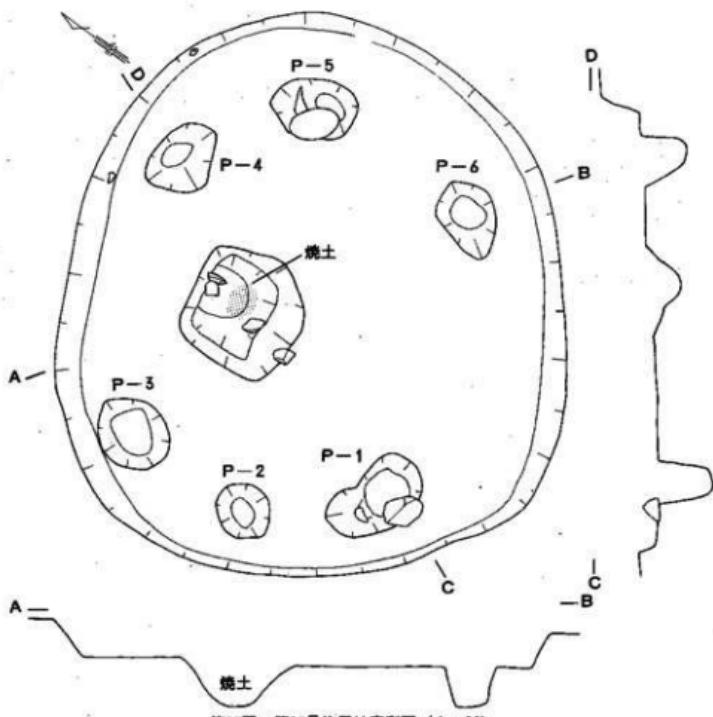
石器、1は打製の横刃形石器、2は緑泥変岩の磨製石斧。



第35図 第14号住居址実測図（1:60）



第36図 第14号住居址出土遺物（3分の1）（石器：1、2は覆土中 土器拓影；1～8は覆土中
土器；1～4は床上）



第37図 第15号住居址実測図 (1 : 60)

第15号住居址（第37・38図、図版8）

遺構（第37図、図版8）

本住居址は北に第13号住居址、西に第11号住居址に隣接する位置を占む。壁高は一定しており40cmである。立ち上りは一定の傾斜を持っている。

床面はやや軟弱である。南西がやや低くなっているが床面全体は平である。

本住居址ではピットは6個検出されたが、主柱穴はP-1、3、4、6であると考えられる。P-2、P-5は副であろうと思われるが、整然と配置されている。深さは順番にP-1が57cm、P-2が48cm、P-3が51cm、P-4が47cm、P-5が43cm、P-6が48cmを計る。底部は丸底ないしは平底でやや傾斜していた。炉はP-2とP-5の中間やや西壁に近い位置に設けられており、床面から50cmを計る。炉の中央部に焼土が5cm堆積していた。本住居址も組石を欠いている。

遺物（第38図）

土器、1・2・3・6・7は、渦巻文や唐草文が施されている深鉢形土器。4・5・10は匏状器具にて縦横・斜に施文された深鉢形土器。8は細い条線文土器。9は地文が縄文に匏状器具による沈線文が施された土器。総じて曾利II～III式に比定されるもの。石器、1は短冊形打製石器、綠泥変岩の横刃形石器。



第38図 第15号住居址覆土出土遺物（3分の1）（石器；3は刃）

第16号住居址（第39・40図）

図版8)

遺構（第39図、図版8）

本住居址は北に第9号住居址、東に第17号住居址に挟まれた位置にある。プランは、北側の壁が一部内側に入り込んでいるが全体としては梢円形であり短径4.7m、長径5.4mを計る。壁は西壁が高く、最高23cm、東壁の方に次第に低くなり、最低4cmの壁高を計る。西壁は直に近い。

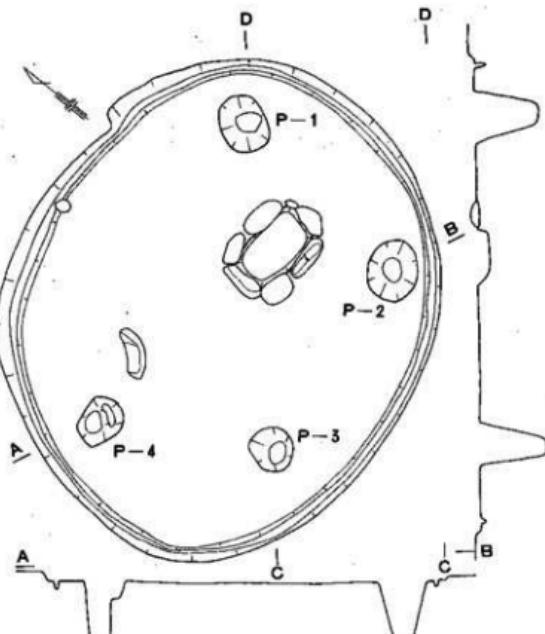
周溝は壁の立上りから3～4cm床面に入った所を削り取り、壁に沿って一周している。深さは一定しており9～10cmを計る。床面は軟く、良いとは言えない。東隅が最も高く西側に向って傾斜しており12cmの差がある。

ピットは4個検出された。P-1とP-4との距離はP-2とP-3の距離よりも長く、南東の方向に寄っているものの、いづれも柱穴柱と考えられる。大きさ及び床面からの深さは、65～70cmと一定しており底はいづれも丸底である。組石炉はA地区の他の住居址の炉がすべて北西壁寄りに掘り込まれていたのに対して、本住居址では東側に寄っている。保存が良く組石のすべてが残った状態で検出された。（図版14）

遺物（第40図）

土器、1は縄文土器片。2は縄文と円状の併行沈線文土器。3は半截竹管による斜に交錯する文様の土器片。4は口縁部破片で、横位に竈先で連続的に刻目付した土器。5・6は壺形土器、頸部の隆帯に竈先による刻目文が施され、その下部に斜に沈線が引かれている土器。7・8・9は竈先による沈線文土器。10は壺形土器の胴部に隆線によるS字状文が施された土器。11は口縁部が内湾し口舌に指頭による連続指痕文をめぐらし、頸部から胴部に条線文を施した類例の少ない壺形土器。12は波状口縁に突起付し口縁部に区画文が集中し胴部に縄文を施した深鉢形土器。11は中期初頭の土器とも考えられる壺形土器。そのほかは曾利Ⅱ～Ⅲ式に比定される土器である。本址は7の土器から、曾利Ⅱ式の時期と考えられる。

石器、1・2は硬砂岩の橢形打製石斧。3はくびれのある打製石斧。4は石垂、5は凹石。



第39図 第16号住居址実測図 (1:80)



第40図 第16号住居址出土遺物（3分の1）（石器；1～5は覆土中、土器拓影；1～6
8～10は覆土中、7は床上、土器1は覆土中、2は床上）

第17号住居址（第41～43図、図版9）

遺構（第41図、図版9）

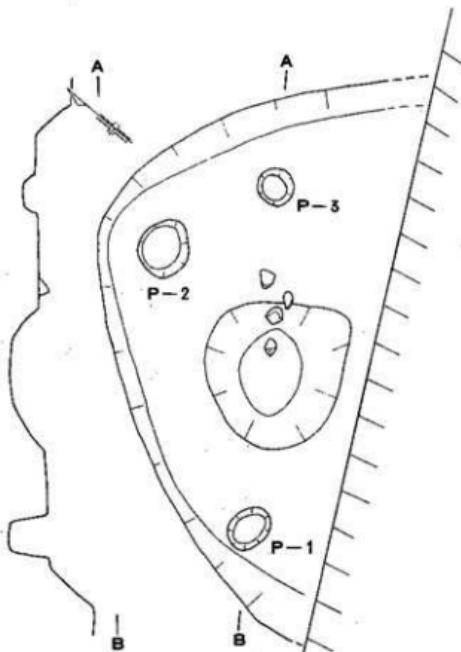
本住居址は北西に第16号住居址、南西に第14号住居址を見る位置にあり、第9号、第14号住居址と同様に遺構の東半分を道路により欠いている。

プランは、遺構全体が確認できないために不明であるが壁及び床面、ピット等についてみると壁高は33～46cmを計る。床面は軟かであるが、ほぼ水平である。ピットはP-1、2、3と3個が検出されたが主柱穴はP-1 P-2の2つであると思われる。

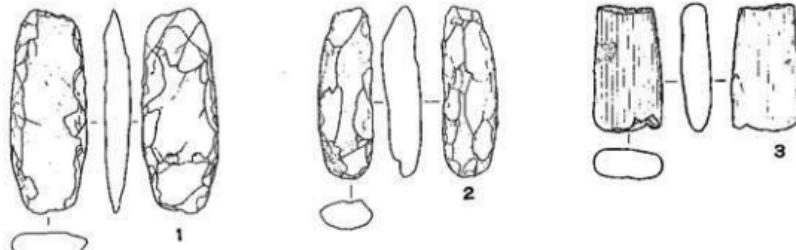
炉は北西壁に近く、P-1とP-2のはば中間に掘り込まれている。A地区の他の住居址と同様な位置関係を占めていると言える。粗石はすべて欠いており、住居外に持ち出されたと推定される。

遺物（第42・43図）

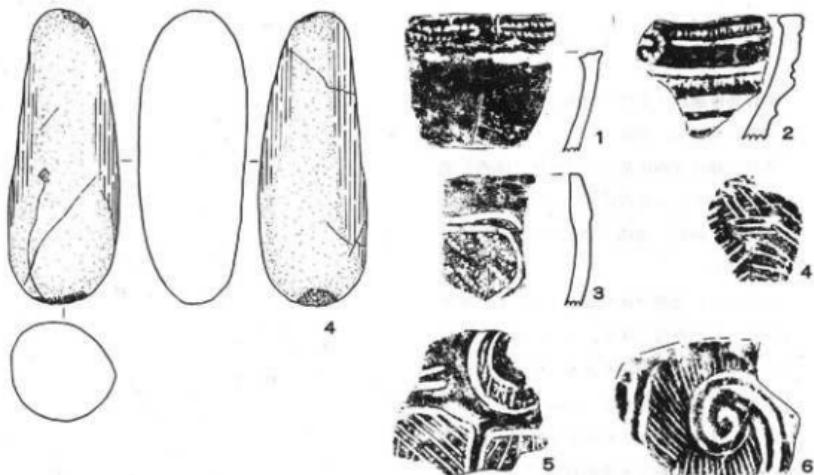
石器、1は硬砂岩で表面に自然面を残し短冊形打製石斧。2は硬砂岩で1と同様自然面をわずかではあるが両面に残している短冊形の打製石斧。3は緑泥変岩磨製石斧である。（43図）1は深鉢形土器の口縁部、口舌に2条の沈線が引かれ、沈線内は籠の先で連続的に刺突文が施され頸部は無文の土器。2は1と同様の施文の土器の口縁部。3は口縁が無文帶で頸部下には縄文が施され、沈線で区画された菱形土器の口縁部である。4はやや乱れる沈線文土器。5・6は唐草文様の土器。石器、4は硬砂岩の磨製石斧。



第41図 第17号住居址実測図 (1 : 60)



第42図 第17号住居址覆土出土石器 (3分の1)



第43図 第17号住居址出土遺物（3分の1）（土器；4はが内、他は覆土中）

第18・20号住居址（第44～46図、図版9）

遺構（第44図、図版9）

第18号・20号住居址は遺構群中最も東に位置し、第18号住居址は第20号住居址によつて切られているが、道路で削り取った表土のために、遺構全体を検出することはできなかつた。

プランは、第18号住は円形と思われるが定かではない。壁高は20cmである。床面の状態は悪く軟弱である。ピットは土壤合わせて6個検出されたが主柱穴はP-1の他は不明な点が多い。土壤42はフランコ状の断面を呈し、土壤48は壁面から120cmと深い。

炉は他の住居址と同じに北西壁寄りに設けられ、炉石の東半分を欠いている。

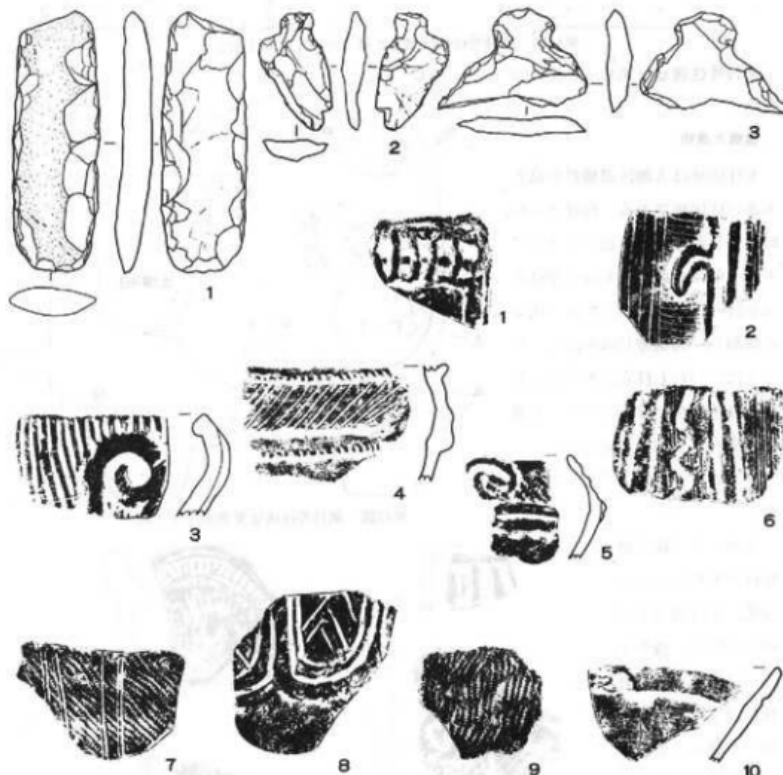


第44図 第18・20号住居址実測図（1：60）

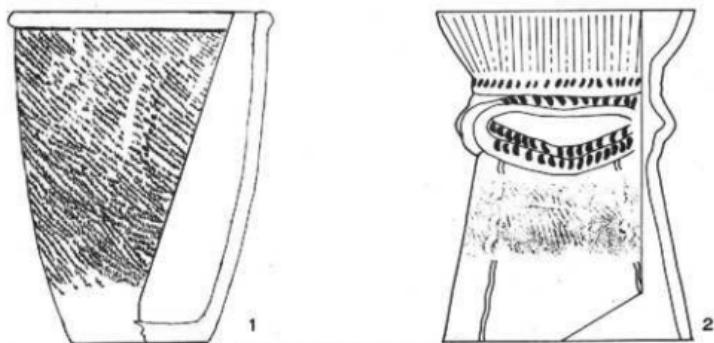
第20号住居址は、第18号住居址の床面を20cmほど掘り込み床面を作っている。本住居址からは遺物は検出されなかった。

遺物（第45・46図）

土器（18号住居址）1はソメン状の粘土紐を貼付した曾利Ⅰ式土器、2は半截竹管による縦横に引かれた沈線文と隆線が垂下の除中左にくびれた文様構成の土器。3～6は併行波線と渦巻および条線文が施された土器。7・9は縄文土器。8は沈線文土器。10は無文の薄手土器。総じて1を除いて曾利Ⅱ～Ⅲ式に比定される土器である。石器、1は硬砂岩打斧。2・3は石匙。46図1は口縁部に厚い隆帯をめぐらし胴部は縄文が施された深鉢形土器。2口縁部縁に沈線が施され、頸部に階円状区画があり鎧状器先端が刺突文が施され、胴部は縄文の深鉢形土器。



第45図 第18号住居址出土遺物（石器；1・2は覆土中%，3は床上%）
土器拓影；1～6、8～10は覆土中%）



第46図 第18号住居址出土土器 3分の1 (床上出土)

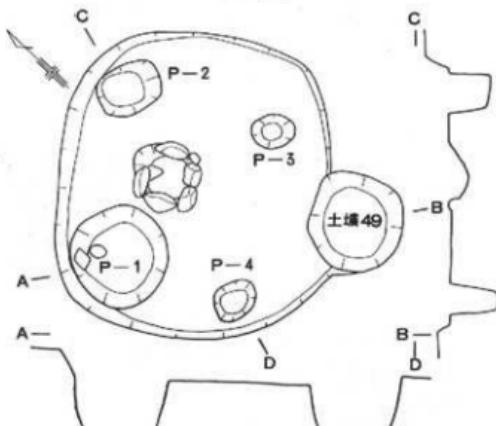
第19号住居址 (第47・48図、図版10)

遺構と遺物

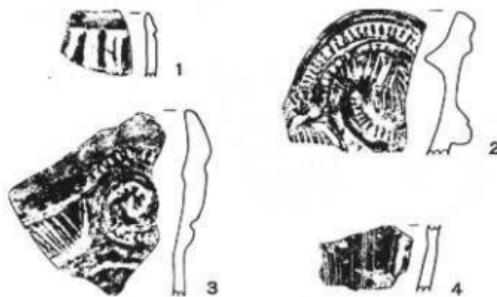
本住居址はA地区遺構群中最も小さい住居址である。長径3.3m、短径2.9mの円形に近いプランである。壁は北西で最も高く壁高23cmを計る。床は軟弱である。南東に傾斜し、高低差17cmを計る。ピットはいづれも柱穴であるが、P-1は壁面がくぼんでいる。土壤49は南西壁を切り込んでいる。

炉は小さく北側の石を欠いていた。

土器。1は粘土縁
貼付の曾利I式の口
縁部、2は渦巻文に
刻目を付した壺形土
器の口縁部。3は波
状口縁文に渦巻文を
施した壺形土器。4
は半截竹管による併
行沈線文土器。總じ
て曾利II式。

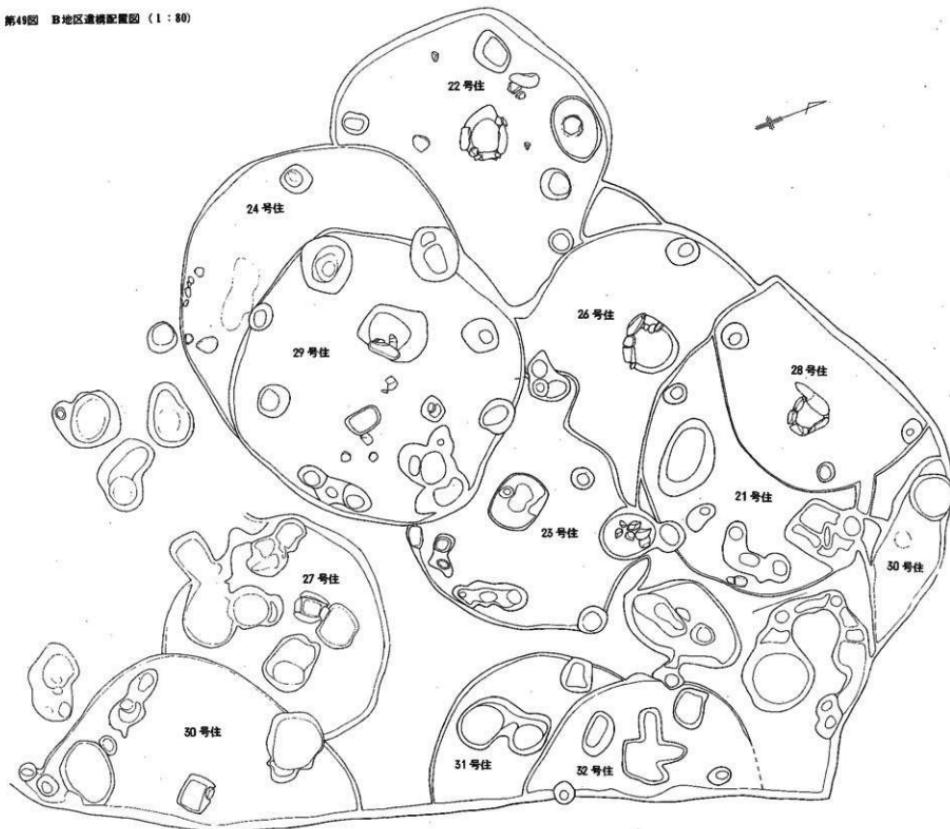


第47図 第19号住居址実測図 (1:60)



第48図 第19号住居址覆土出土土器 (3分の1)

第40図 B地区遺構配置図 (1:80)



B地区遺構

本地区は、道路を挟んで東側に位置している地区である。この地区的東には除外地の果樹園がある。この果樹園には多くの遺物が散布しているところより、おそらく、遺跡の中心部は、むしろ、果樹園ではないとも考えられる。南側は水路が通っているので調査はこの線で打切らざるを得なかった。北側は段丘に近いところまで遺構はあるらしいが、この地域も時間的な制約があり調査はできなかった。

調査方法は、A地区と同様10mのグリッドを設定して調査を行った。

本地区的住居址群は、A地区的住居址群と異なり、切合が多いという点で相違が認められる。この切合を区分してみると、次のようになる。**a**群は24号を、29号が切り、24号は22号を切る群。**b**群は28号が21号を切り、21号は26号を切っているという一群、23号と26号は住居址の面は略平であるため、切合の関係が明確に把握することができなかつたが、26号の北壁がわずかであるが認められるということになれば、26号より23号の方が古いということになる可能性もある。**c**群は32号が31号を切っていることは明らかであるが、両住居址とも道路に接しているため他の住居址との切合は不明である。**d**群は30号が27号を切っている。30号も31号32号グループと同様道路があるため切合関係は不明である。**e**群は両側が道路で、おそらく、道路の下にもぐっているものと考えられるが、今回調査ではそれ以上できなかつた。従って他の住居址との関係も不明である。**f**群はB地区的中央部に発見された群で、25号住居址は単独で切合は認められない。34号住居址は床面上迄削り取られているため、重複関係は明かでない。

その外、土壙が18基発見された。この土壙は単独なものと、住居址内に重複しているものがあるが、おそらく、住居址が作られて行く過程に設けられたものであろう。

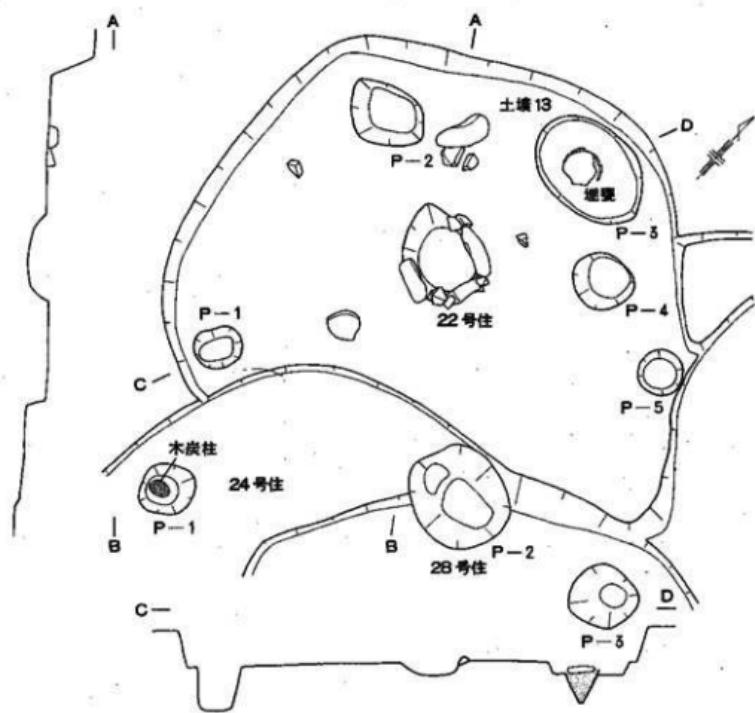
第22号住居址（第50・51図、図版10）

本址は、B地区A群の南側に発見された住居址である。住居址の東側は第24・29号住居址と重複している。規模は東西5.4m、南北は重複で不明である。床面はローム層に30cm切り込んで作られ西側の一部を除いて堅硬であった。炉址は中央やや南寄りにあり、規模は東西約95cm、南北1.0m。楕円形の石圓炉で、東側の石が一部抜かれている炉址である。柱穴はP-1、P-3、P-5と24号住居内のP-2が主柱穴ではないかと考えられる。埋甕はP-2内から出土した。

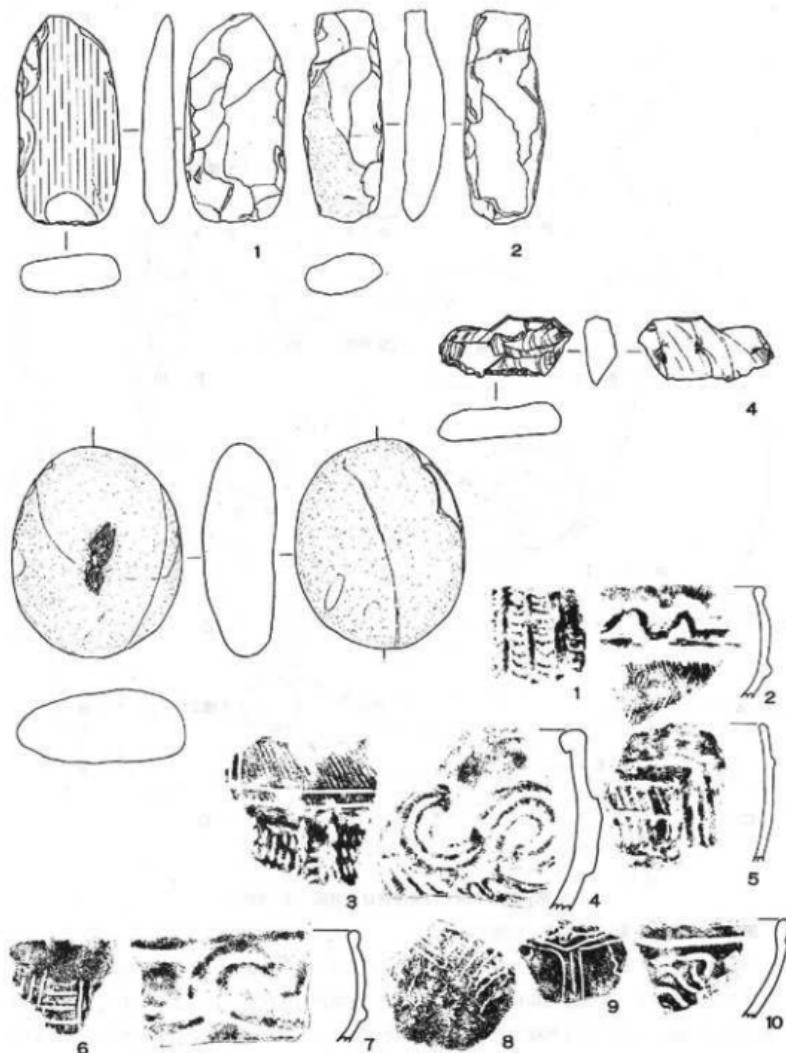
遺物（第51図）

出土した土器は、他の住居址にくらべて多い方ではなかつた。出土状況は埋甕を除いては主に覆土中に多かつた。1は縄文中期中葉の土器片。2・3は曾利Ⅱ式、4～8はⅡ～Ⅲ式に併行するものであろう。9・10は縄文後期。

石器、1は撫形、2は短冊形、3は凹石である。

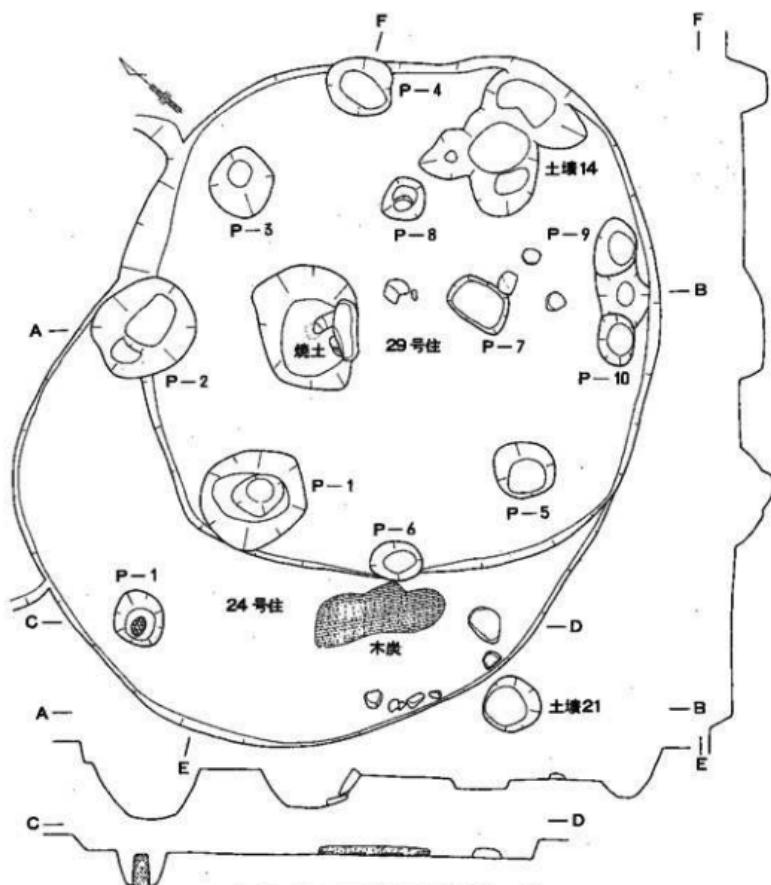


第50図 第22号住居址実測図 (1:60)



第51図 第22号住居址出土遺物

(石器；1～3は%、4は%，土器；1～10は%)



第52図 第24・29号住居址実測図 (1:60)

第24号住居址 (第52~54図、図版10・11)

24号住居址は、B地区東側第29号住居址によって3分の2切り取られている。また、第22号住居址を切っている。住居址の規模東西5.8m、南北は第29号住居址によって切られているため不明である。従ってプランは明確でない。床面は余り堅緻でない。周溝は発見されなかった。柱穴はP-1のみが明かとなったのみで、他は第29号住居址によって削り取られたかたちとなつたが、第22号住居址と第29号住居址との接点にあるP-2あるいは本址の柱穴かもしれない。P-1は外径60×55cmの楕円形に掘り込まれ、底径34×33cmの楕円形、底は平である。柱穴の底部より柱が炭化されたままで検出された。この柱の径は底部で18cm、焼残った頭で13cm、高さ35cmを測る。

柱の材質は栗である。柱が柱穴の底から焼け残ったという例は少ない。こうした例から柱の大きさを知る上で、大変貴重な資料と言わなければならぬ。また、建築用材としての資料としても同様なことが言える。そのほか、床面上に栗材で長さ1.4m巾50cm厚さ7~9cmの割ったと思われる炭化した板状が検出された。炉址は第29号住居址が作られる折り取り去られたものであろう。東側壁に添って床面上に拳大~頭大の自然石7個が、併列状に検出されたが、その性格を推察するにいたらなかった。

遺物 1は口縁部に刻目をめぐらし、頸部から胴部は縦文が施され縦に沈線を引いた壺形土器。2は竹管による併行沈線文土器。中期初頭に位置づけされるもの。3は壺形土器の口縁部。縦の巾の広い隆帯に綾杉状の文様を施しその間に太目の沈線が施されているあまり見かけない土器。4は隆帯間に籠状器具によって斜及び横位に施文された土器。5は口縁部が無文頸部楕円区画文のある土器。6は縦文が施された土器。7は口縁部無文帯、頸部以下刻目と綾杉文。8は地文が縦文で縦に沈線文と結節文が施された壺形土器である。9は地文に縦文が施され、籠状器具で区画され縦に結節縦文が施文された土器。10・11・14は、縦文地に縦または円状や螺旋状に沈線が施されている土器。12・17は地文が刷目で縦に蛇行沈線文が施された壺形土器の破片。13は無文土器。15は籠状器具による刺突文が施された壺形土器。16は隆線による渦巻文が施された壺形土器の口縁部である。18は炉址内から検出された斜縦文土器である。以上は曾利Ⅱ式に比定される土器と考えられる。総じて曾利Ⅱ~Ⅲ式に比定できよう。

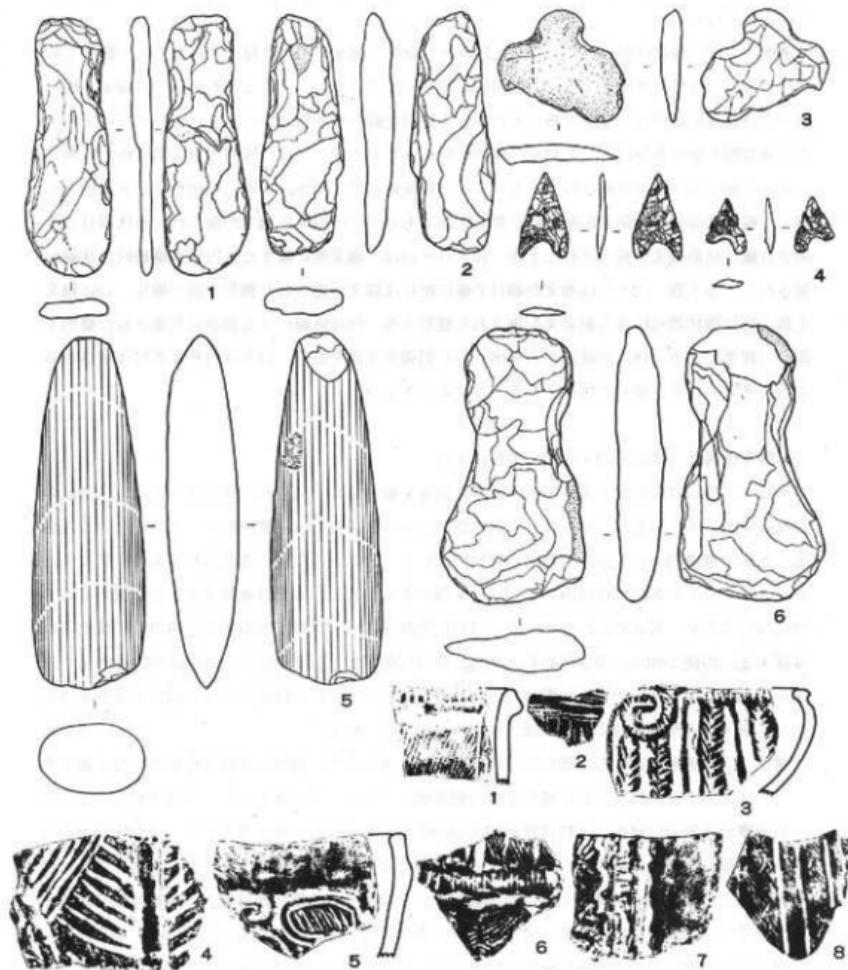
第29号住居址（第52・55・56図、図版10・11）

本址は、第24号住居址と第23・22・26号住居址を掘り込んで作られた住居址である。住居址の規模は東西5.4、南北5.5m、ローム面に切り込んだ深さは22cm、楕円形のプランを有する住居址である。遺構内のピットは全部で10個検出された。そのうち柱穴と考えられるものはP-1、P-3、P-5と第24号住居内のP-2の4個が考えられる。床面は東側壁に接した個所にやや軟弱なところが一部認められたが、そのほかは堅緻であった。炉址は中央やや西寄りに検出され、長径1.3、短径1.04m、深さは約45cm丸底、楕円形を呈する石圓炉址で、炉内は焼土と木炭が充満していたことより、相当長い間使用されたものであろう。炉石は68×28cm花崗岩で火を受けた炉石と拳大の自然石を残すのみで他は全部抜き去られている。

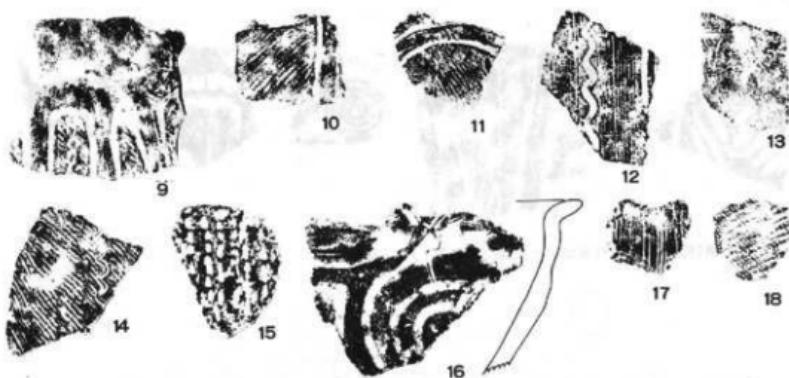
遺物 1は壺形土器の頸部破片で、隆帯による区画文の内に斜状の沈線文が施された土器である。2は床面上から検出された壺形土器の胴部破片である。3は床面上から発見されたキャリバーフォルムの壺形土器の口縁部、文様は隆起線文の渦巻文が施されている土器である。4も床面上から出土した壺形土器の口縁部で、隆起線文の渦巻文の周辺に連続の刺突が施された土器である。5・6も床面上から検出された壺形土器の頸部破片で、隆帯文の上に籠状器具による連続刺突文が施され、隆帯の下部に沈線による波状文が引かれ、胴部は無文帯と思われる。7は覆土中から出土した壺形土器の破片。太い沈線が綾杉状に施された土器である。8は床面上から出土した壺形土器の頸部の破片である。文様は縦に太い隆線が垂下させ、そのなかに結節条線が施された土器であ

る。9は渦巻文の施された菱形土器の口縁部に近い破片である。10は地文に縄文と巾の広い沈線文が縦に施され、その上部に連続に縦の沈線を施した同一施文具により刺突状文が施された土器。11は地文は縄文で、その上を鎧状器具で渦巻文や斜線文を施した菱形土器の破片である。

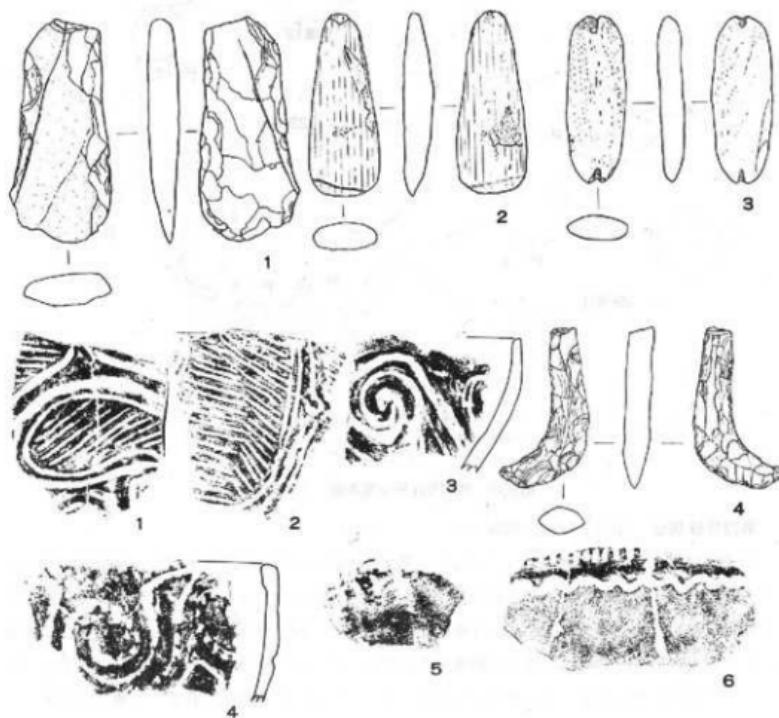
石器、1は覆土中から発見された短冊形打製石斧。2はおなじく覆土中から出土した緑色岩製の磨製石斧である。土器は総じて曾利Ⅲ式に比定できよう。



第53図 第24号住居址覆土出土遺物 (石器; 1~3, 5・6, 土器; 1~8は1%, 石器; 4は1%)



第54図 第24号住居址出土土器（3分の1）（9～14、16・17は覆土中、15は床上、18は炉内）



第55図 第29号住居址出土遺物（石器；1・2は覆土中%，3・4は覆土中%）
（土器；1は覆土中%，2～6は床上%）



第56図 第29号住居出土土器（3分の1）（7は覆土中、8～10は床上、11は炉内）



第57図 第23号住居址実測図（1:60）

第23号住居址（第57・58図、図版11）

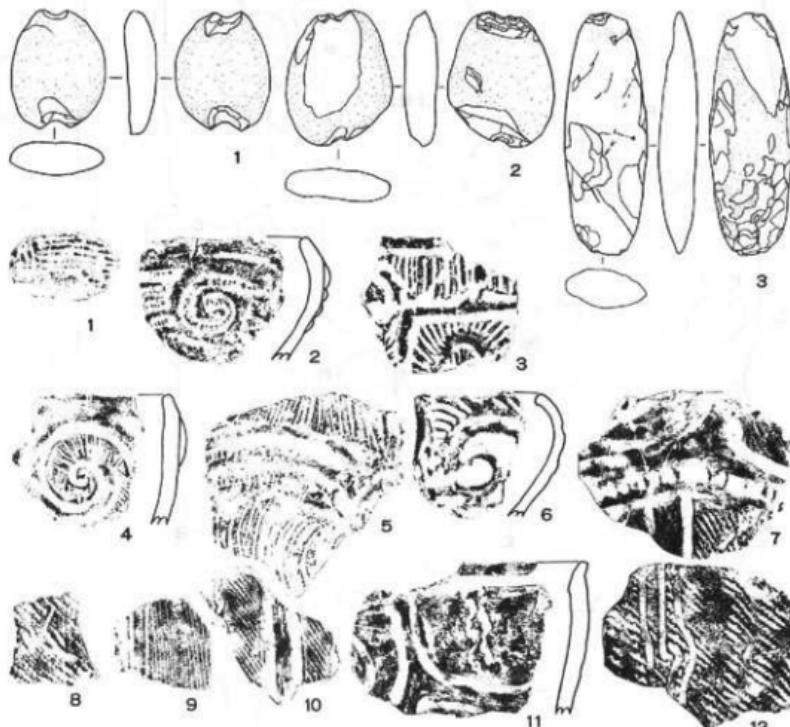
本住居址は、第29号住居によって切られ、第26号住居址を切った形であるが、発掘中土層の搅乱で壁面が明らかでなく、一部に貼床らしきものや、層位の混乱などが重なるなど調査をいっそう困難にした。壁面が確認されたのは東壁のみであって、他の壁は明かではない。床面はよく踏固められていた。ピッドは全体で7個検出されたが、そのうち柱穴と考えられるものはP-2、P-6と第29号住居址P-4、第21号住居址のP-8の4柱穴と考えられる。土壌12は頭大くらいの自然石が6個検出された。

炉址、本址の炉址は第29号住居址に寄った位置に設けられ、長径1.18m×短径94cm楕円形丸底。

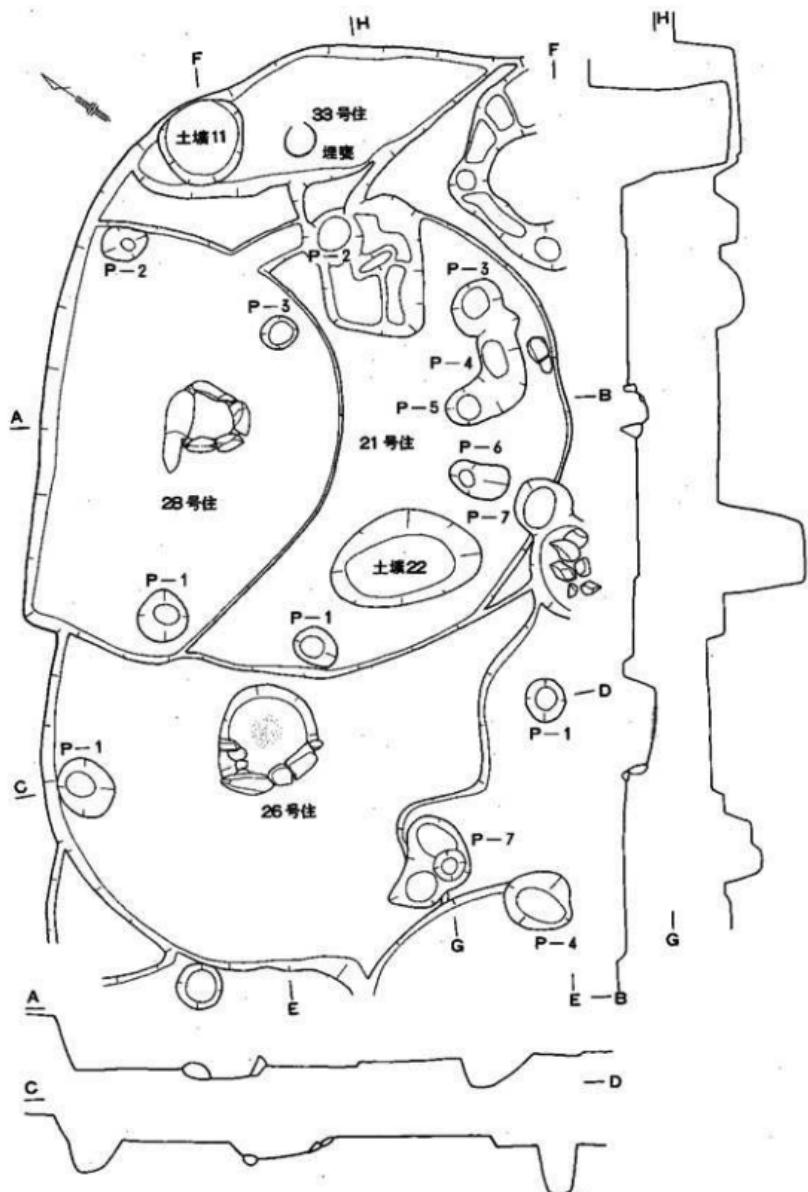
炉石は全部持ち去られてしまっている。炉址内にピット7が検出されたが、おそらく、本址が作られた以前のものではなかろうか。

土器、1は竹管により縦と横に文様を施した曾利の古い方に位置する土器であろう。2は隆線による渦巻文と区画文が施された深鉢形土器の口縁部である。3・4・5・6は隆線による区画文と渦巻が施され、その間に籠状器具で縦または扁状にその間を埋っている土器の破片である。7は口縁部を隆線で区画し頸部下は磨消文が施されている甕形土器と思われる。9は竹管による浅い併行沈線文土器片。10は地文が繩文で縦に太い沈線が引かれ、その間に結節繩文が施された深鉢形土器の破片と考えられる。11は地文は浅い繩文が施され、その上を沈線による区画が作られ、そのなかに結節条線が施されている深鉢形土器の口縁部破片である。12は地文が繩文で縦に太い3本の沈線文が施され中の1本が結節文の深鉢形土器の胸部破片と考えられる土器である。

石器、1・2は硬砂岩で作られた石重である。3は脛部がふくらみをもつ打製石斧である。土器は総じて曾利II～III式に比定されよう。



第58図 第23号住居址 出土遺物（3分の1）（石器；1～3、土器；1・2・4～12は覆土中、3は床上）



第59図 第21・26・28・33号住居址実測図 (1 : 60)

第26号住居址（第59・60図、図版11）

本址は第22号住居址と接近し、第29・23・21・28号住居址と重複している住居址である。規模は切合が多く明でないが、その径は約4.8～5.0mの円形プランをもつ堅穴式住居址と考えられる。床面はやや西側にわづかながら傾斜し総体に堅緻である。柱穴はP-1のみが明かであるが、そのほかの柱穴は切合の住居址中にあるものと考えられる。炉は住居址のほぼ中央にあり長径1.16m、短径1.04mの楕円形石器である。炉石は約半分が抜き取られている。炉内は焼土が充満し相当ながい間使用されたらしい。

土器、1は深鉢形土器の口縁部で、竈状器具による連続刺突文が横位に5条施された土器。2・4は口縁部が直立に近い壺形土器で、隆線に刻目を付し渦巻文と、頸部以下竈描による綾杉文が施された土器。3は楕円形区画文内に刺突文が施された土器。5・7・8は深鉢形土器の口縁部で、渦巻文と併行沈線文で施文されている土器。6は縄文土器の破片である。9は大柄の渦巻文の施された壺形土器。10は深鉢形土器の口縁部で、2条の沈線による蛇行文が施されている土器。11は覆土中から発見された縄文後期の土器である。総じて曾利Ⅱ～Ⅲ式に比定される土器であろう。石器、1は硬砂岩の凹石、2は挽形打製石斧、3は縄泥変岩の磨石。

第21号住居址（第59・61図、図版11）

南側は第26号住居址を切り、西側は第28号住居址によって切り込まれ、北側では第23号を切った状態で検出された住居址である。規模は長径4.9mの円形プランを有している。床面は北側の一部がやや軟弱のところが認められたが、他は堅緻である。住居内のピットは全部で7個を数える。柱穴としてはP-1～P-3が考えられるが、そのほかは不明である。炉は第28号住と重複しているので検出することができなかった。

土器、1は隆帶に連続指頭痕文がめぐり、胴部に併行沈線文を配した縄文中期初頭の土器片である。2は横位に「く」字形のきざみを施し、胴部は無文の深鉢形の土器。3は磨消縄文に沈線による結節状の文様を施した土器。4は斜縄文の土器片。5は隆線に竈先による刻みが施された土器。6は深鉢形土器の口縁部で、竈状器具により連続的に刺突文が施された土器。7・9・10は地文が縄文で、沈線による楕円区画文が施された壺形土器。8は半截竹管文土器。11は深鉢形の口縁部で、口縁部に蛇行線文が1条めぐらされ、下部には沈線による渦巻文が施された土器。12は磨消文土器である。総じて1を除いて曾利Ⅱ～Ⅲ式に比定される土器であろう。

石器、1は縄泥変岩の磨製石斧。2は硬砂岩の短冊形打製石斧。3は硬砂岩の縦型石匙。4は硬砂岩の石垂。

第28号住居址（第59・62図、図版11）

本址は調査の都合上約3分の2発掘できただけで終ってしまった。東側は第26号住居址を切り、北側は第21号住居址を切り込んでつくられた住居址である。規模は東西4.4mを測るが完掘でないでの形は明かでない。床面はほぼ平で堅緻である。第21号住との床面差は2～5cmとごくわずか。

かである。第26号住との床面差は16~18cmである。柱穴はP-1, P-2, P-3は確認できただけに終った。炉は北寄りに設けられ、やや遼在している感がある。規模は南北90cm, 東西75cm, 楕円形を呈している。炉石は自然石7個で組まれている石圓炉である。

遺物

土器、1は深鉢の口縁部、綾杉文とS字形文が施された土器。2は地文は縦文で縦に蛇行の沈線文が施された土器片。3は口縁が無文で胴部に縦文が施された深鉢形土器。曾利Ⅱ~Ⅲ式と考えられる。

石器、1は硬砂岩短冊形打製石斧。2は橈形打製石斧破片。3は自然石を利用し中央に凹がある打製石斧である。

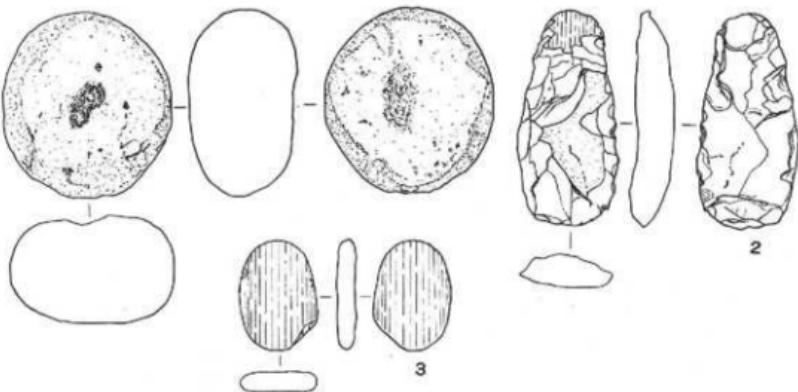
第33号住居址（第59・63・64図、図版11）

本址は東側に第21・28号住居址に近接し、西側は28号住居址同様調査ができなかった。壁は東側の一部が検出されたのみで、他の遺構とは重複はしていないが、西及び南側が未発掘のため住居址の性格を明かにすることはできない。住居内には土壤11が検出された。

遺物

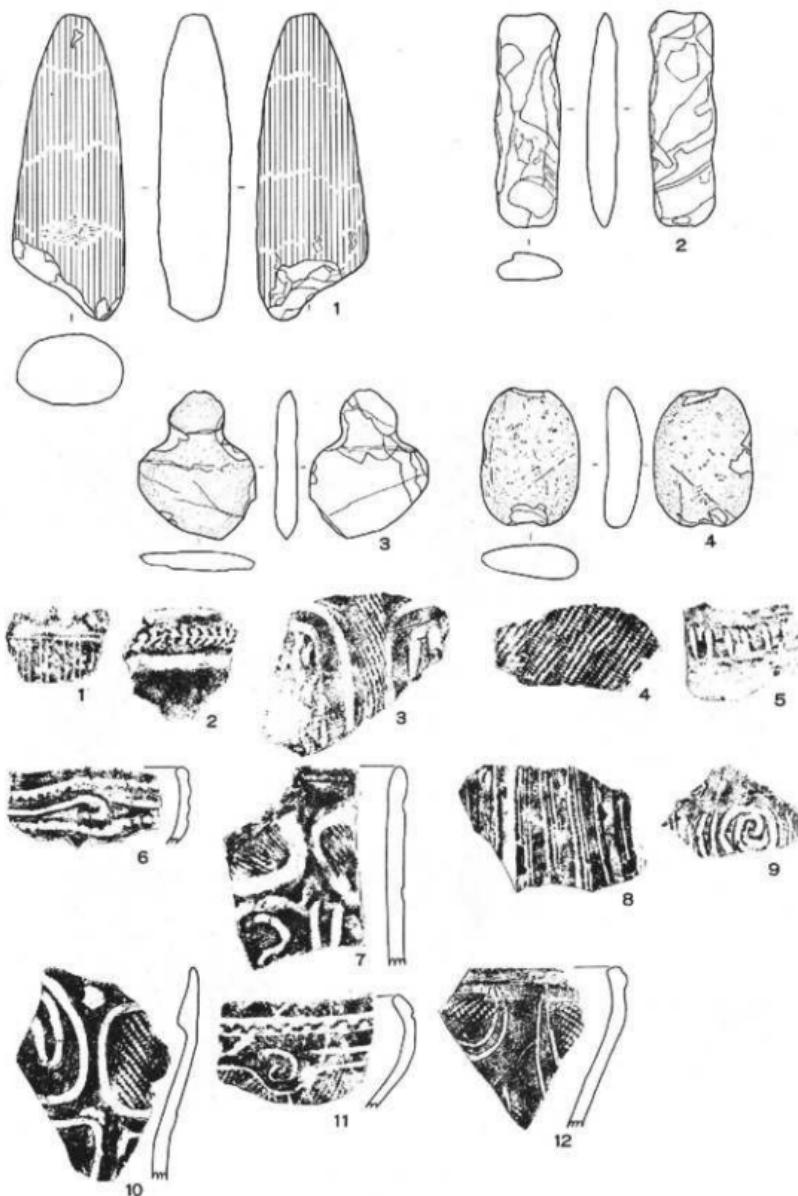
土器、1は沈線による渦巻文の内外を鏡状器具で併行沈線文が施されている土器片。2は1と同様の器具で縦及び斜に施された土器。3は口舌が無文で、その下端に横位に4本の併行沈線が引かれ、胴部は縦文が施されている壺形土器。4は壺形土器の口縁部。第63図1は壺形土器の底部。太い山形の沈線文土器。2は口縁部を欠いた深鉢形土器。地文が縦文で縦と横に沈線による文様が施され、頸部に爪形文風の文様が施された土器。3は大形の壺形土器、隆帯による区画文と唐草文その間を山形状の沈線文が施された土器。総じて曾利Ⅲ式に比定されるのである。

石器、1は硬砂岩の短冊形打製石斧。2は有肩形打製石斧である。

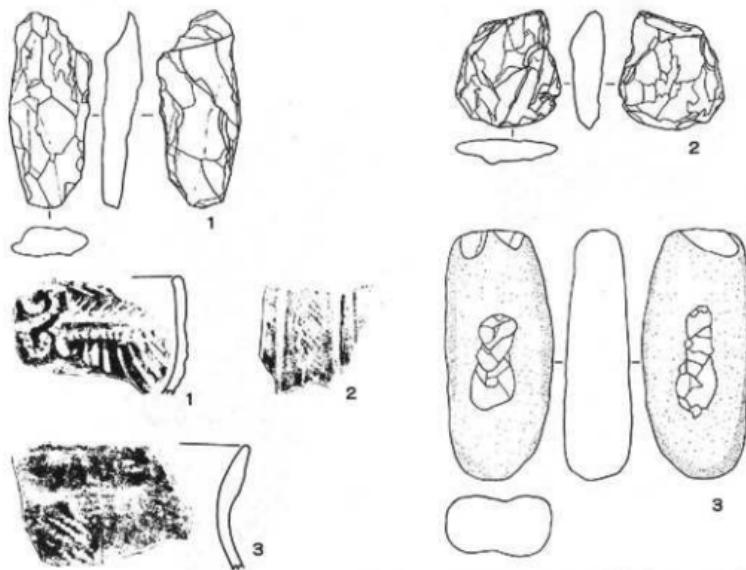


第60図 第26号住居址出土遺物（3分の1）

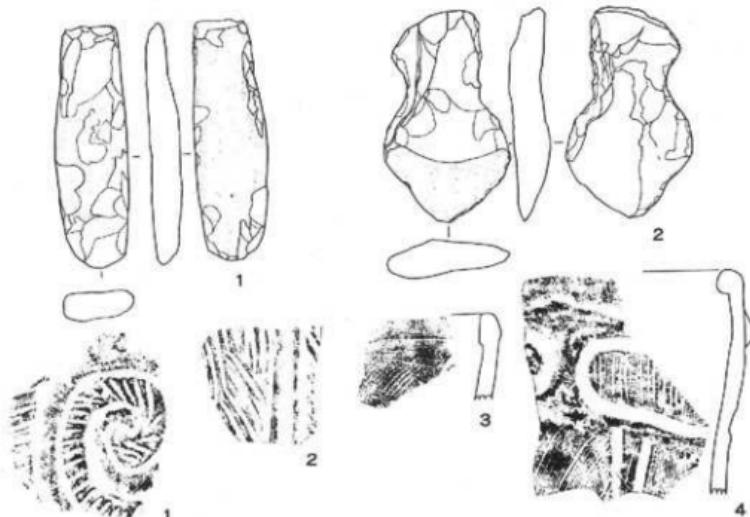
（石器：1～3は覆土中、土器拓影：1～4・6・7・10・11は覆土中
5・9は床土、8は炉内、土器；1は伏鏡）



第61図 第21号住居址出土遺物（3分の1）



第62図 第28号住居址出土遺物（3分の1）（石器；1～3は覆土中、土器；は覆土中。2・3は床上）



第63図 第33号住居址出土遺物（3分の1）（石器；1・2は覆土中、土器；1はピット内、2～4は床上）



第64図 第33号住居址出土土器 (1・2は覆土中分、3は埋藏分)

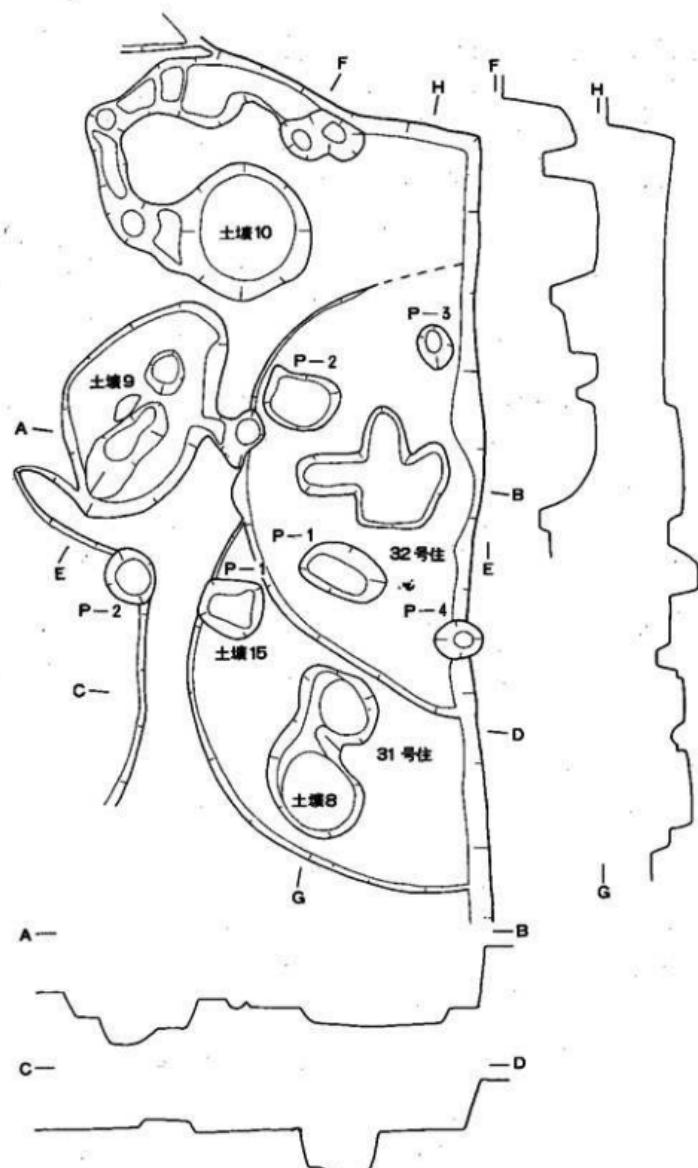
第31・32号住居址 (第65図、図版12)

第31号住居址は、第32号住居址と重複している住居址である。本址の両側は道路になっているところより、今回の調査はこの線で打切られた。住居址の壁は南側と西側の一部が残ったのみである。住居址の径は明かではないが4.5～5.0mぐらいの円形をなすものではなかろうか。No.15は本址の柱穴と考えられるが、他の柱穴は検出できなかった。そのほか造構内にはNo.8の土壙が1個発見されたにすぎない。

遺物。本址の出土遺物は覆土中からは無文の小破片が発見されたが、床面上からは1片の土器も検出することができなかったが、32号住居址によって切られているところより、32号住居址は31号住居址より古いことはたしかである。

第32号住居址 (第65・66図、図版12)

本址は、第31号住居址と重複している住居址である。住居址の北側は段丘で拡張はできない。規模は東西4.5m、ローム面からの切込み約20cm、第31号住居址への切込みは約12cmである。炉址は発見されなかった。柱穴と思われるピットはP-1、P-2で、他の柱穴は用地外で調査はできなかった。遺物、遺物の出土は少なかった。1・2は縄文中期中葉、3・4は曾利IIの新しいところと推定される。



第65図 第31・32号住居址実測図 (1 : 60)



第66図 第32号住居址覆土出土土器（3分の1）



第67図 第27・30号住居址実測図（1：60）

第27号住居址（第67・68図、図版12）

第27号住居址は、今回の調査区域では北端段丘上に近い位置に発見された住居址である。住居址の南側は第29号住居址に近接し、北側は第30号住居址に複合している。規模は東西4.3mで円

形のプランをもつ住居址と考えられる。床は第30号住居址の方向にわずかではあるが傾斜している。床面は余り整緻ではない。炉址は中央やや東寄りに位置し、長径66cm、知徑50cm 4個の自然石組み合せて作った小形の石圍炉である。柱穴と考えられるピットは検出されなかったが、6個の土壙が認められた。

土器

1は粘土紐を井桁状に貼付した土器。2は鉢状器具による綾杉状文と、蛇行沈線文が施された土器片。3・7は鉢状器具により併行沈線が斜及び梢円に施された變形土器破片。4は地文が縄文に綫に沈線で3条引かれた土器。5は口縁部に1条の沈線文が横位に施された無文の深鉢形土器である。6は無文の深鉢形土器と思われる。8は隆線による渦巻文と鉢状器具による沈線文が施された變形土器の破片である。1は曾利Ⅰ式。その他の土器は曾利Ⅲ式に比定されるものであろう。

石器

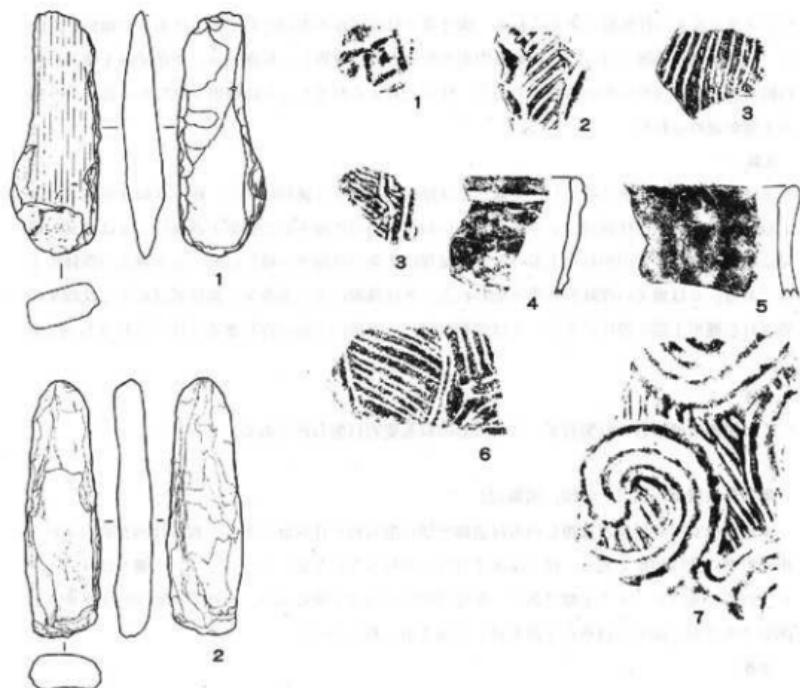
1は短冊形硬砂岩の打製石斧。2は大形の綠泥変岩打製石斧である。

第30号住居址（第67・69図、図版12）

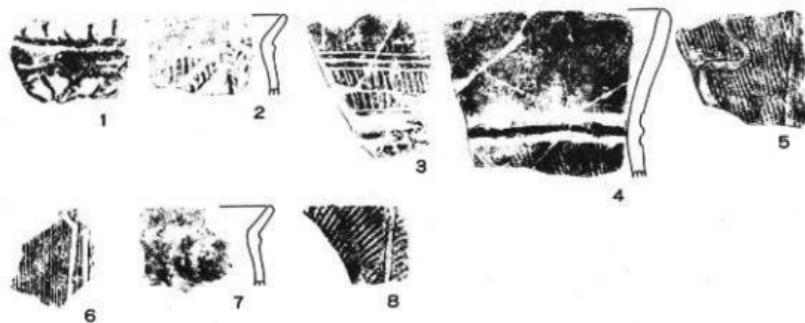
本址は第30号住居址と重複し西方は道路で切り取られた住居址である。規模は南北約6.0mの楕円形堅穴式住居址である。柱穴はあまりはっきりしないがP-1、P-4、土壙6は柱穴と考えられる。他はピットと土壙である。炉址は住居のはば中央にあり、長径75、短径62cmを測る石围炉であるが、頭犬の自然石1個を残して抜き取られている。

土器

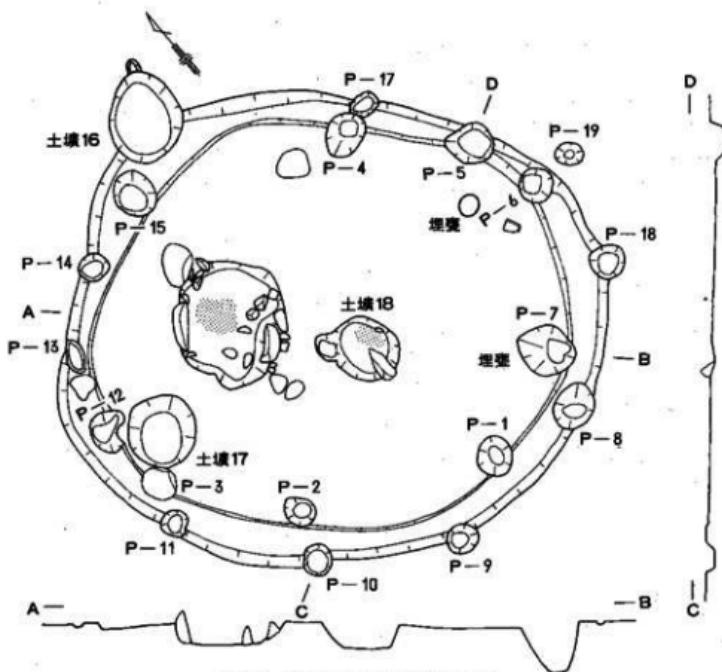
1は隆帶に指痕文のある土器片。2は口縁部が無文帶で頸部の隆線に刻目が施された深鉢形土器破片。3は竹管により縦横に併行線で施文された變形土器と思われる。4は口縁部が無文帶、頸部に粘土紐を貼付け胸部は斜縄文が施された深鉢形土器である。5・8は地文に縄文で綫に鉢状器具による蛇行沈線文が施された土器片。6は鉢状器具により小渦巻懸垂文と、併行沈線が施された土器片。7は薄手無文の深鉢の口縁部。1・2・3は縄文中期初頭と考えられる。4は曾利Ⅱ式。5～8は曾利Ⅲ式に比定できるであろう。



第68図 第27号住居址出土遺物（石器；1は覆土中%、2は覆土中%）
（土器；1～7は覆土中%、8は床上%）



第69図 第30号住居址覆土出土土器（3分の1）



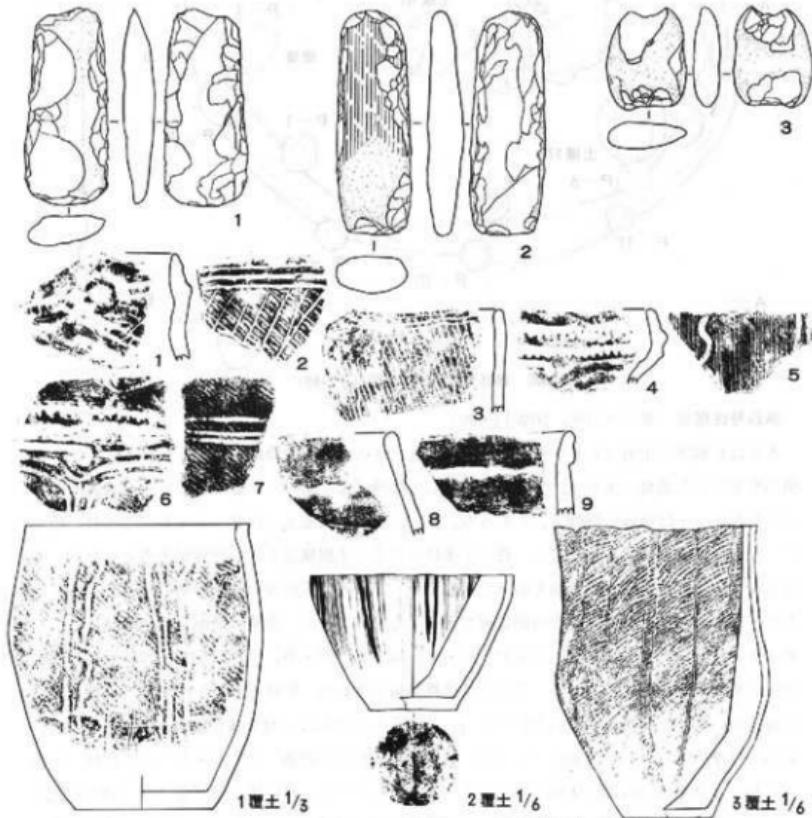
第70図 第25号住居址実測図 (1 : 60)

第25号住居址 (第70・71図、図版13・20)

本址はB地区の中央よりやや南寄りに発見された住居址で、規模は東西5.5m、南北5.3mの楕円形を呈した遺構。床面は、南にやや傾斜し全般的によく踏みかためられている。遺構内に検出されたピットは全体で18個で、そのうち、柱穴と考えられるものはP-1・P-2・P-15・P-4・P-5の5個と考えられる。従って多柱穴による上屋構造をもつ住居址と考えられる。本址も使用上不都合とみえ、床面を貼床し拡張を行っている。拡張後の壁は周溝の線で立上っていたのであるが、発掘作業中壁を外側に掘り過ぎてしまっている。周溝は壁面全体に設けられてた。P-8・P-9・P-10・P-11・P-13・P-14・P-17・P-6・P-18等は拡張後の柱穴ではないかと考えられる。P-7内には伏甕が検出された。炉は中央やや西寄りに設けられ、長径1.32、短径1.2m楕円形石圍炉である。そのうち、炉石は2個を残して抜き取られている。炉内には拳大の自然石が6個投げ込まれた状態で出土した。埋甕、P-5・P-6とに接して検出された。埋甕は口縁部が床面より7~8cm高くなっているのは貼床して拡張される以前に埋めたものであろう。本址で特に注目されるのは柱間の間に周溝が設けられているという事である。このことは、今迄あまり資料がないので、今後資料の増加をまって考えたい。

遺物（第71図）

土器、1は深鉢形土器の口縁部で、隆線による渦文が施された土器片。2は横位に併行沈線文を施し、胴部に沈線による井桁状文が施文された壺形土器片。3は半截竹管文が施文された壺形土器。4は、口縁部を隆線で飾られたキャリバ形土器。5は櫛状具による縦の細線に籠状器具にて蛇行沈線が施された土器片。6は縄文地に沈線による併行線文や渦巻文が施された土器。7は縄文地に併行沈線文が施された土器。8は、内湾する無文の鉢形土器の破片。9は、無文で口縁部が折返しになった壺形土器。実測された土器。1は、地文が縄文で縦に沈線で結節文が施された土器。2は、縦に細い沈線文が施された鉢形土器。3は、口縁部を欠く壺形土器、地文が縄文で縦に沈線が施された土器。総じて曾利II式に比定されるものであろう。

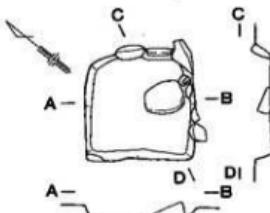


第71図 第25号住居址出土遺物 (石器; 1~3は覆土中1/6, 土器拓影; 1は床上1/6, 2~9は覆土中1/6)

第34号住居址（第72図）

遺構

本址は第24号住居址の南1.5m、道路より東に7mの位置に炉址のみが残った住居址である。本址は水田造成の折破壊が甚しかったため、炉のみが残ったものと思われる。規模は、東西1.2m、南北1.5m方形の石囲炉址である。炉石は6個残して他は抜き去られている。炉内に径40cm平盤の自然石が投げ入れた状態で検出された。遺物は出土しなかった。



第72図

第34号住居址組石炉実測図（1:60）

第3節 土壌及び溝状遺構

土壌及び溝状遺構（第73～77図、図版16）

溝跡の発掘により発見された土壌はA地区では50基、B地区では21基を数える。また、土壌A-9に接合して溝状遺構1箇が検出された。

1) 土壌

土壌についての考察は今回住居址の検出と考察に追われ、大部分の時間と労力を費したために充分におこなえなかった。そのために、住居址の実測及び断面図、土壌実測図により、平面形、断面形、床面、壁の状態、堆積土を示すに留め、考察は後に譲りたいと思います。

土壌の分類が住居址に関連するもの（生活痕）か、埋葬に関係するもの（土壌墓）か等を考えなければならないが、ここに土壌として一連の番号を付け呼んでいるもの以外に土壌があり、あるいは、土壌とは考えられないものを含んだ恐れもあります。

各図版に示す土壌番号、堆積土は以下のように分類した。

1. 土壌番号はA地区についてはA-で示し、B地区についてはB-で示した。発見順に従い番号を付けてある。

2. 堆積土は次のように数字で層序を区別した。なお、特徴的なものは簡略な表現を加えた。

1 黒色土

2 黒褐色土

3 赤褐色土

4 黄褐色土（ローム粒含）

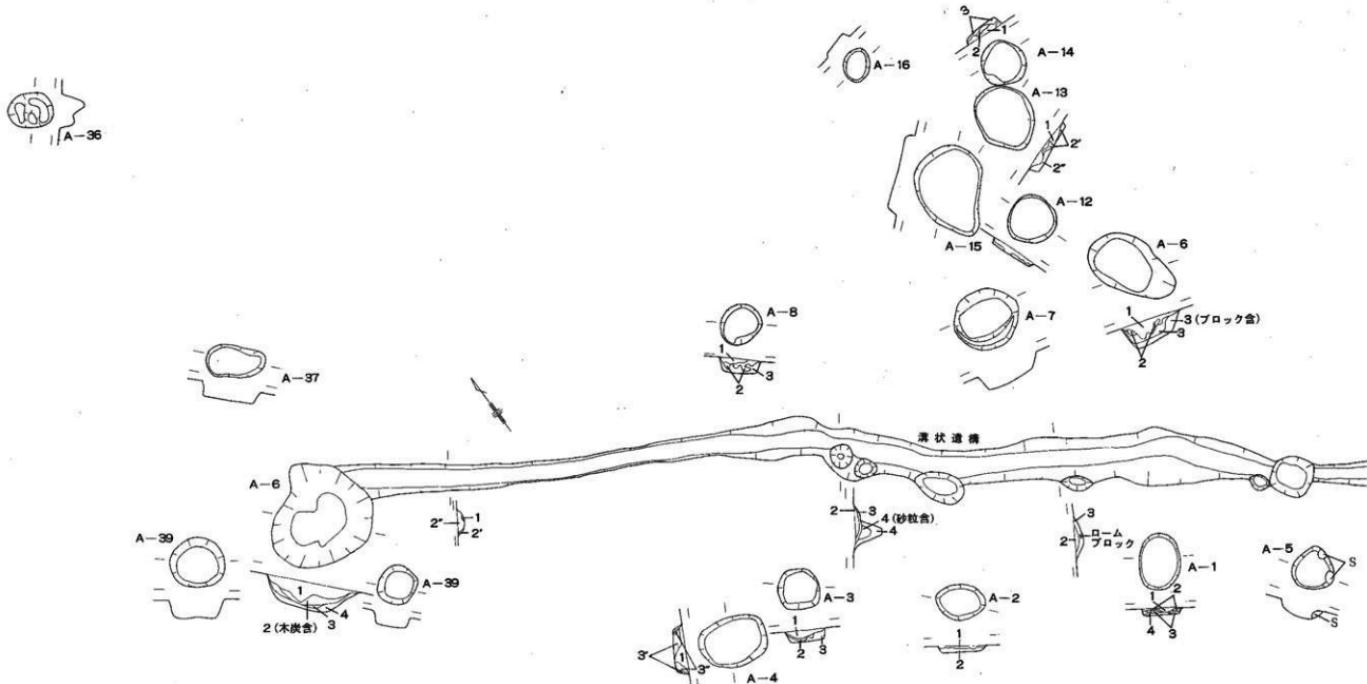
※' (ダッシュ) 極色味が強いほど'の数が増す。

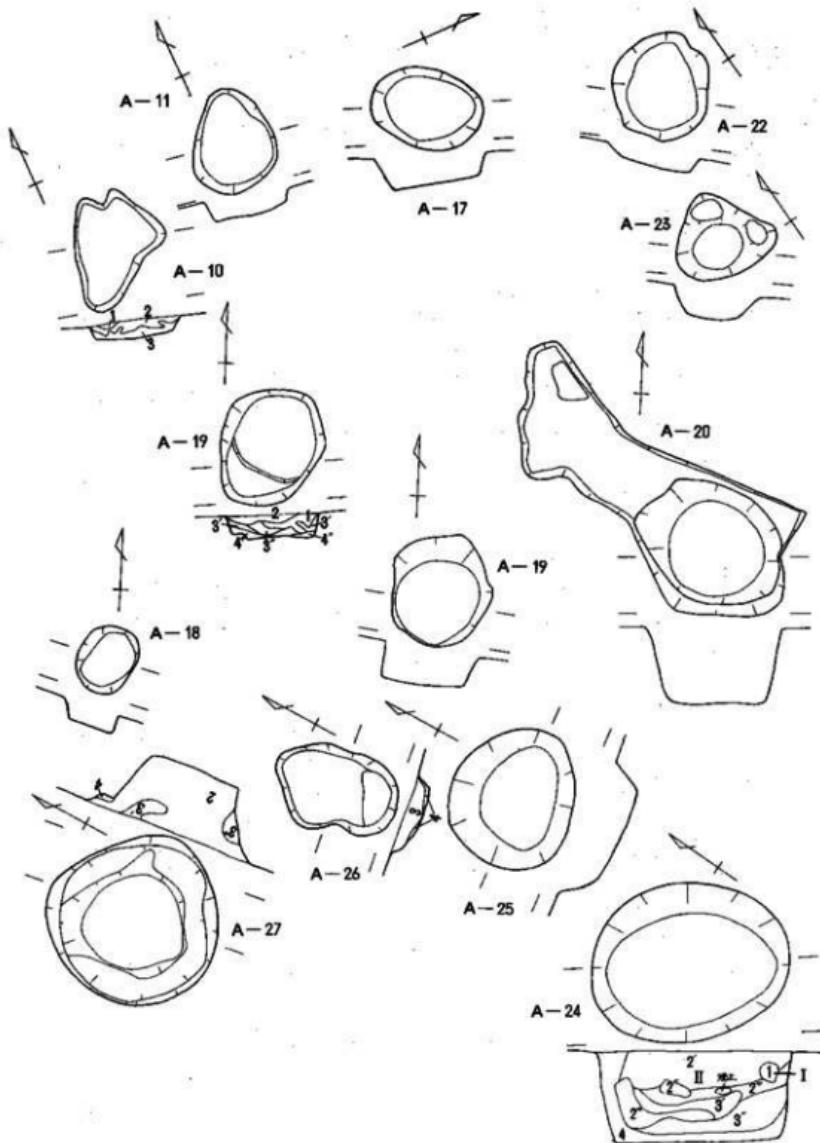
2) 溝状遺構

溝状遺構はA地区南端に発見された。A-9から道路まで至る。長さ23.2m、平均幅0.6m、平均深さ0.14m、高低差0.58mである。溝は比較的浅く、蛇行は少ない。溝の途中にピット状の落込みが見られ、これらの堆積土中からは、ローム粒が混った砂が検出された。

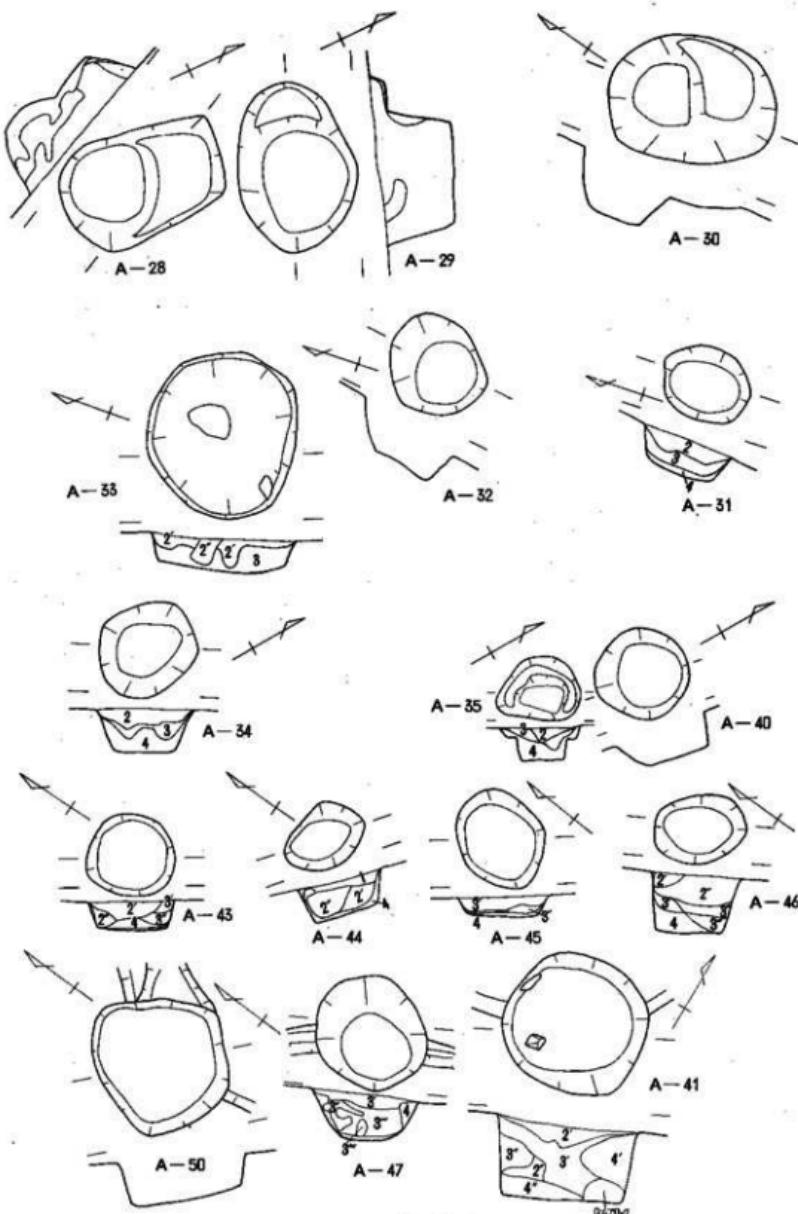
この溝状遺構は水の流れた跡であろうと思われるが、土壤9号との関連、さらに、住居址との関連は不明である。

第73図 A地区土壤構造達成実測図 (1:60)

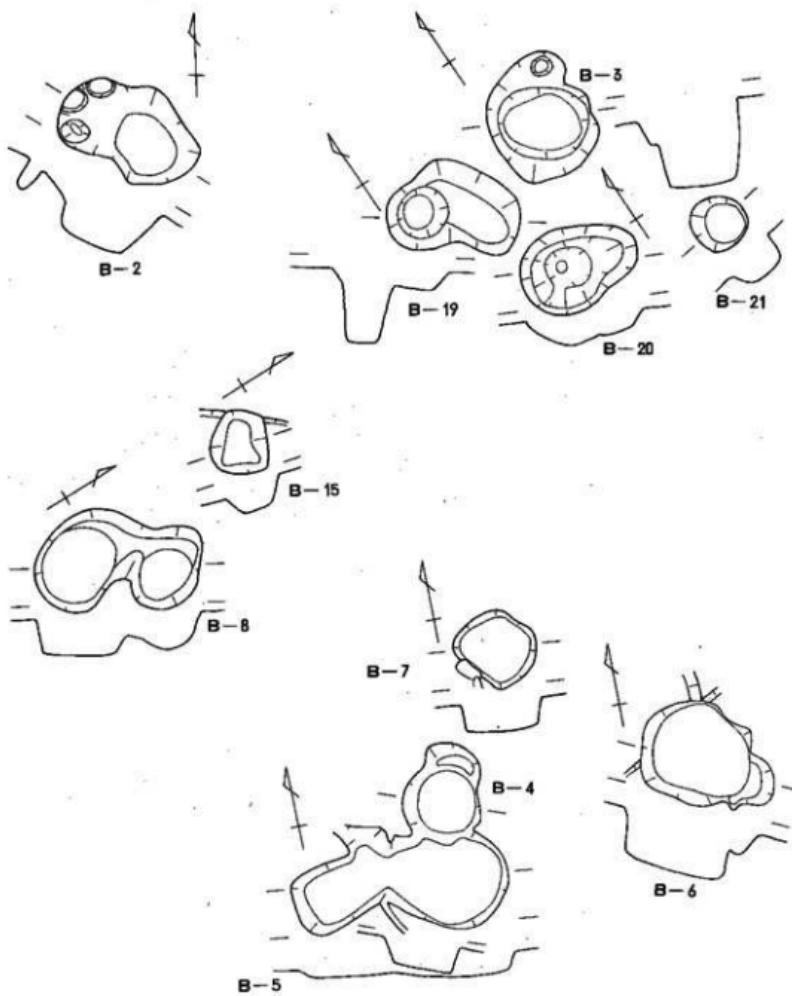




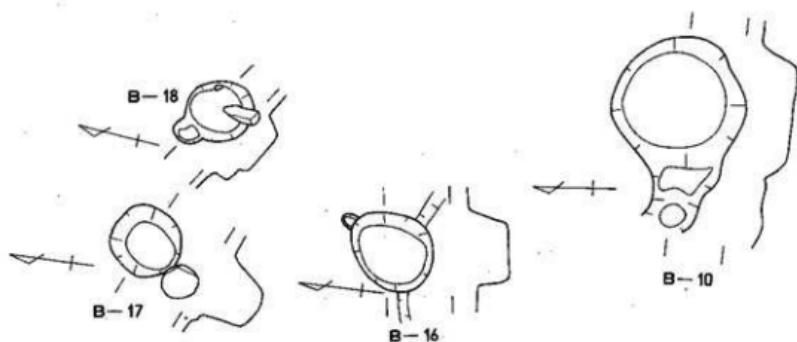
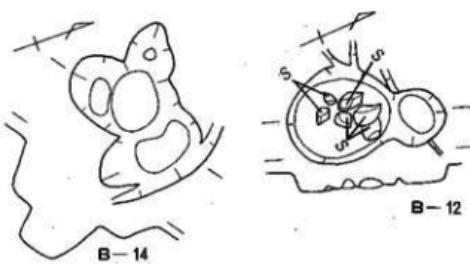
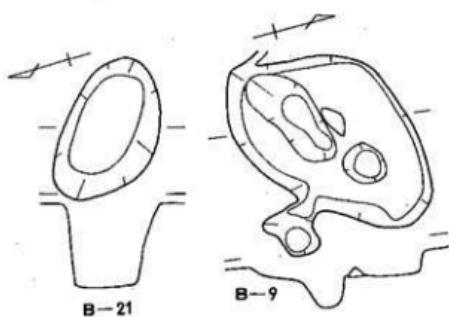
第74図 A地区土壤実測図 (1 : 60)



第75圖 A 地區土壤實測圖 (1 : 60)



第76図 B地区土壤実測図 (1 : 60)



第77図 B地区土壤実測図 (1 : 60)

資料 図 版

図版1 遺跡全景（上はA地区，下はB地区）



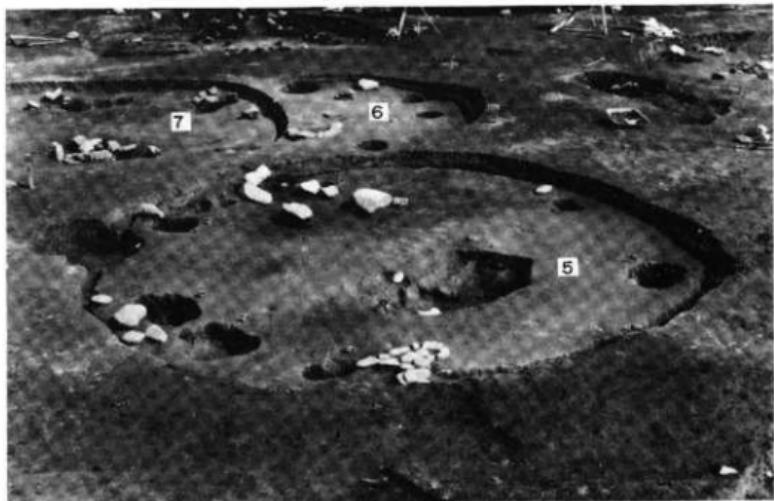
图版2 第1号(上), 第2号(下)住居址



图版3 第3号(上), 第4号(下)住居址



図版4 第5号(上), 第6号(下)住居址



图版5 第7号(上), 第8号(下)住居址



図版6 第9号(上), 第10号(下)住居址



图版7 第11号(上), 第13号(下)住居址



图版8 第15号(上), 第16号(下)住居址

